研究ノート

ジェントリフィケーションを考える
——都市再編過程にあるトリノを事例に——

矢　作　　弘

Gentrification : A Case Study of Turin under Urban Restructuring

要　旨

産業構造の転換は都市地理全体を再編し、ポスト工業化で打撃を受けて衰退した地区では、ジェントリフィケーション（gentrification）を引きおこします。本稿では、ポスト工業化都市のジェントリフィケーションについて考えます。FIATが縮退し縮小都市化したトリノ（イタリア）でも、20世紀後半に衰退した旧市街の周縁部（San Salvario）では、21世紀を迎えたころからジェントリフィケーションがおきています。ふるい零細商店を押しのけ、空き家を転換利用し、あるいは路上駐車場を転用してトレンディな飲食店を開業するバールナイゼーションを通し、ジェントリフィケーションが進展しています。結果、街区の「格上げ」がおきています。しかし、一方、バールナイゼーションは社会的不公平を併発し、地区のステークホルダー（利害関係者）間に深刻な軋轢を生み出しています。ジェントリフィケーションは衰退を起点にはじまりまる地区の「活性化」「改善」ですが、衰退地区のSan Salvarioの考察を通し、J. ジェイコブズが提示した「コミュニティが活力を持続するための4条件（「ジェイコブズの4条件」）」の妥当性を検証します。

キーワード
トリノ、ジェントリフィケーション、バールナイゼーション、パーキングナイゼーション、縮小都市、J. ジェイコブズ

ABSTRACT

Industrial restructuring brings out gentrification at a deteriorating area under the influence of post-industrialization, reshaping the urban geography as a whole. This paper focuses on the gentrification of the post-industrial city. In Turin (Italy), a shrinking city where FIAT has been shrinking, gentrification started in the edge of the historical center around the beginning of 21st century after experiencing deterioration at the late half of 20th. Gentrification has been advancing there as barnization that old and small stores have been displaced, and vacant buildings and street-parking lots have been transformed into trendy bars and cafe ; 'Up-grading of districts' is going. At the same time, however, the barnization has been producing social injustice and serious conflicts among local stakeholders. Gentrification is "a vitalization and improvement" of district, starting at the deterioration. Through the changes San Salvario has experienced, this paper talks about the adaptability of "4 Principles of Jacobs" indicated by J. Jacobs as principles to keep a community active

Keyword
Turin, Gentrification, Barnization, Parkingnization, Shrinking City, J. Jacobs

はじめに

1．調べようとしたこと

「産業構造の転換は都市地理全体の再編」につながります。再編の「かたち」は、都市のある部分では街区／街路の変容として表出します。トリノについて語れば、FIAT のワン・カンパニー・タウンの時代が終焉し、脱製造業都市に再編されるプロセスでは文化や歴史、娯楽が強調され、ツーリズム／消費活動を重視する都市政策が展開されるようになりました。本稿では、産業構造の転換に伴って地区（街区／街路）レベルで観察されるようになった変容についてその意味解釈を試みることにしました。ここでの変容は、具体的には、ジェントリフィケーションです[1)]。さらに帰納的に思考し、地区レベルの変容を通し、再び「産業構造の転換が引きおこす都市地理全体の再編」について考えます[2)]。

昨今、トリノでは中央駅の代替わりが進行しています。流線形のガラス張り駅舎が完成し、新装開業した Porta Susa（スーザ駅）は、イタリアの主要都市を結ぶ新型特急列車「イタロー」が発着する一方、パリ、リヨンに走る TGV（高速鉄道）の始発駅です。21世紀を迎えて以降、Porta Susa はトリノ中央駅になるための地歩を着実に固めつつあります。

しかし、歴史的には旧市街に近接する Porta Nouva（新駅）が中央駅です。現在もイタリア半島のつま先を出発した特急列車がアドリア海沿いを走り、10時間余かけて到着する北の終着駅は Porta Nouva です。１日の乗降客数はローマの Termini、ミラノ中央駅に次ぎイタリア第３位です。呼称は「新駅」ですが、豪華なバロック様式の駅舎は19世紀半ばの建築です。イタリアの他の主要都市にある中央駅と同じように、幾本も並ぶホームはターミナル形式になっています。

この５年余の間、トリノを頻繁に訪ねています。トリノは20世紀の100年間、FIAT と二人三脚の歴史を織りなしながら成長／拡大、衰退／縮小、そして再生を経験してきました。訪問の目的は、その変容について調べることでした。今度の滞在（2015年夏）では、Porta Nouva の東側地区（San Salvario）で進展するジェントリフィケーションについて調べることにしました。ジェントリフィケーションが地区のステークホルダーの間に軋轢を生み、社会的不公平をつくり出しています。その実態に迫ることにしました。

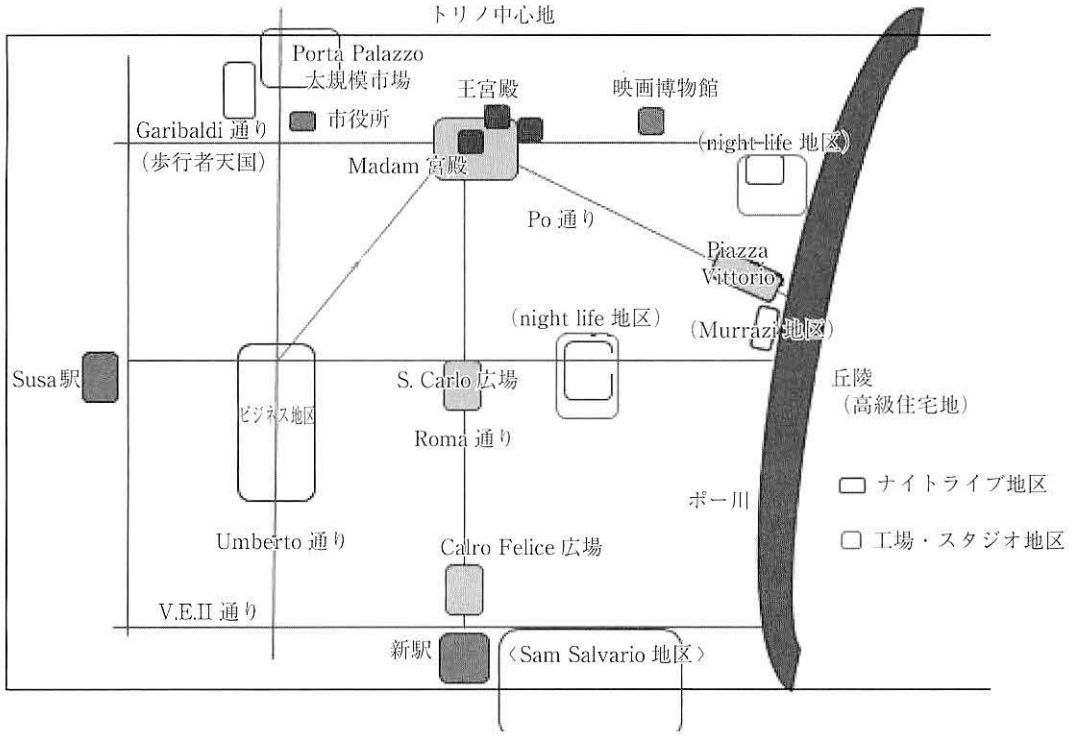
Porta Nouva に近接したホテルを常宿にしてきました。Vittorio Emanuel Ⅱ 世大通りが Porta Nouva の正面を走っています。石造りの回廊、そして夏場は豊かな緑陰を作くるプラタナスの並木がとても美しい大路です。トリノを代表するアヴェニューです。駅舎を出、Vittorio Emanuel Ⅱ 世大通りを右に曲がると San Salvario です。逆に、左に折れれば Crocetta です。両地区は、中央駅や旧市街までの距離など地理的条件は同じです。開発されたのは19世紀後半から20世紀初頭。いずれも新開地でした。

トリノ訪問の都度、駅の東側地区（San Salvario）と西側地区（Crocetta）の風情（streetscape）が大いに違っていることが気になっていました。J. ジェイコブズは著書『アメリカ大都市の死と生』で、コミュニティが安全で活力を維持するためにはコミュニティに多様性があることが重要であると指摘し、多様性を育むための４条件（「ジャイコブズの４条件」）を提示したことで有名です。トリノでは、San Salvario が「ジェイコブズの４条」を満足しているのにもかかわらず、地区の衰退と治安問題を抱えてきました。逆に、Crocetta は「ジェイコブズの４条件」をまったく外していますが、20世紀を通じて（現在も）中間階層の安定した、治安のよい住宅地でした。似た時空間に位置しているのに、なぜ、両地区にそうした違いが生じているのか。「ジャイコブズの４条件」の妥当性について考えることにしました。

① 両地区の都市計画に注目しながら、歴史的な形成にどのような違いがあったのか

② 昨今の縮小都市再生戦略（文化や歴史、娯楽を強調し、ツーリズム／消費活動を重視する都市政策）が両地区の違いを促進するのにどのような影響を与えているか

地図1． トリノの旧市街の南にある San Salvario（VE II＝Vittorio Emanuel II 世大通り，新駅＝Porta Nouva）



――を調べました。政府の介入（intervention）と「地区の変容」、あるいは「地区の安定性」との関係についてです。そのことは取りも直さず、トリノという都市の再編過程を注視しながら、San Salvario で進展するジェントリフィケーションの経済的、社会的な意味を読み解くことにつながります。

2．San Salvario と Crocetta――対照的な風情

両地区の風情の違いを描写することからはじめます。Porta Nouva を出て Nizza 通りを渡ると San Salvario です。市内に数ヵ所あるエスニック街区の1つです。夕刻になるとアフリカ系黒人、アフリカ／アラブ／トルコ系イスラム教徒の男たちが屯し、路上にベッタと座り込む者、麦酒瓶のラッパ飲みをする者、ピザを立ち食いする者、歩道をふさいで立ち話する者……。界隈には、できれば避けて回り道したくなる、少々、不穏な雰囲気が漂っています。しかし、実際は、夜、私自身が幾度も行き来し、一度も危険を経験したことはなかった。したがってそうした風情に対し先験的な、階級的、人種的な偏見があることは認めるのですが、それでも馴れないツーリストはつい身構え、「注意深くなってしまう」街区です[3)4)]。



トリノ中央駅（Porta Nouva）の西側街区の風景

この街区を抜けると、ジェントリフィケーションが San Salvario で特に急進展している街区です。レストラン、カフェ、バール（軽食中心の飲食店）の開店、集積が急です。週末は午前3、4時まで営業しています。客は「新しい中間階層（new middle）」と呼ばれる人々です[5)]。教会広場（Largo Saluzzo）では、深夜、700-800人の学生風が集まり、飲み、食い、おしゃべりしています。学生が集住し、あるいは屯して地区が変容することを「studentfication（学生街区化）」と表現し[6)]、学生と地区変容の

関係をめぐる研究が都市社会学や都市地理学の分野で注目されるようになっています。San Salvario は、まさに studentfication の舞台になっています。

また、San Salvario にはエスニック系の店が多くあります。ケバブレストラン、イスラム教徒を相手にする飲食店／スーパーマーケット、移民のための両替ショップなどです。アフロヘア系の理髪店／美容院があります。貧しいためにパソコンや電話を買えずに、祖国の家族と連絡するのに困っている移民を相手に、電話／パソコンブースを提供している情報店舗もあります。

街区を東に移動し、Cristina Madama 通りを越えると中間階層が暮らす集合住宅地です。さらにその東の、ポー川河岸の公園に面するアヴェニュー沿いには、豪華な集合住宅が連棟しています。San Salvario は人種的にも、所得階層の面でも、また、建物の用途も混在が基調になっています。

一方、駅の左側を線路に沿って走る Sacchi 通りの西側は Crocetta です。駅に近い街区が San Second。そこを南北に抜けているのが San Second 通りです。庶民的な、素敵な商店街です。精肉店、青果店、菓子店、製パン店、靴店、カフェ、スーパーマーケットが並び、「街区に暮らす住民の、日々の生活をしっかり支えています」という風情があります。食料品店の合間に小じゃれたブティックや美容院、インテリアショップがあります。今度の滞在では、アパート式ホテルに投宿して自炊暮しをしました。San Second 商店街のお蔭で、1月半の間、買い物に困る経験をすることなしに過ごすことができました。

San Second 広場には露店が毎日並び、野菜、チーズ、肉、生花を売っています。毎朝、買い物に来るのでしょうか、布製の買い物袋をぶら下げた中年の女性が店主と長話をしています。San Second の露天市とは別に、調べていた論文に「Crocetta には、毎日、トリノで最もファッショナブルな露天市が立つ」という記述がありました。7月下旬の晴れた日に、その露店市を訪ねました。教会を中心にごく狭い範囲でしたが、ざっと見渡して100店ほどの露店が出ていました。ここの露店市では野菜、果物、チーズ、肉などの生鮮店は少なく、9割ほどが衣料、アクセサリー、袋物、靴、化粧品、帽子店でした。件の論文には「ファッショナブル」とありましたが、高級品を並べている店はごく少ない。多くは露店に相応しい、中級品以下の品揃えでした。

教会の脇に「トリノ物語」という説明碑がありました。それによると界隈は「1900年代初頭の開発。弓型張り出し窓や塔のあるアールヌーボ建築など「中の上クラス」の市民のための住宅街として開発されました」とのことでした。木曜日の午前中でしたが、それ風の奥様方が大勢いました。週末の賑わいはいかほどか、と思いました。

地区内を、路上観察を兼ねて幾度も散策しましたが、結局、Crocetta ではケバブレストランを見かけることはなかった。路上で麦酒瓶のラッパ飲みをするアフリカ系黒人に出会うこともなかった。親の代、さらには祖父の時代から Crocetta に暮らしているという中間階層、あるいはそれ以上の所得階層が圧倒的に多い。ヤッピーとか、「新しい中間階層」とか呼ばれる金融バブル時代以降の中間階層とは別の、幾代かそこに暮らし続けている階層の人々です。また、イタリア人の単一人種コミュニティです。

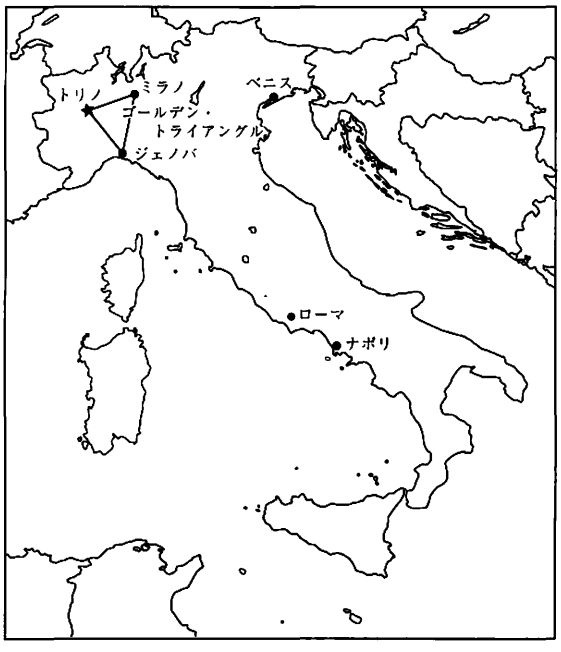
Ⅰ. 歴史、及び地理

1. トリノ

東西に走るアルプスは、スイス、フランス国境で南下し、地中海に至ります。トリノはその山並みが屈折するところに位置し、延長距離300 km の範囲でアルプスを一望することができます。西アルプスを源流とするポー川が市内を流れています。そしてトリノはイタリア第4の都市です（ローマ、ミラノ、ナポリ）。

16世紀以来、サヴォイア公国、サルディーニア王国の首都でした。王室ではフランス語が頻繁に使われていました。装飾から食事までフランス文化の影響を受けた都市です。旧市街には石造り回廊が18 km の長さで走っています。雨

地図2．トリノはイタリア北部のゴールデントライアングルに位置している。



や雪に濡れることなくまち歩きをすることが出来ます。また、バロック、アールヌーボ、新古典主義の、素晴らしい装飾建築が散在しています。アヴェニューはプラタナスの並木道がとても美しい。夏にはカフェが深い緑陰の下にテーブルと椅子を広げます。朝刊を読む古老、犬の散歩の途中に立ち寄る熟年女性……。滞在中、そこに陣取ってエクスプレッソを注文し、のんびり長居するのは最高の贅沢でした。

王室が収集した美術工芸品を展示する美術館、カイロの美術館に次ぐコレクションを誇るエジプト博物館など、美術／博物館が市内に40弱あります。観光ガイドのベストセラー『ロンリープラネット』は、「イタリアで最も美しい都市の1つです。その華麗さはパリに比肩される。サヴォイア家は豪華なバロック都市を造営し、そこをヨーロッパ、北アフリカから収取した財宝で埋め尽くしました」と紹介しています。

イタリアが統一された1861年に、トリノはその最初の首都になりました。しかし、それもわずか3年のことでした。フィレンチェに遷都され、その後、間もなくローマが首都になりました。首都の喪失は政治エリートや知識階層を失うことにつながりました。その時期、トリノは「政治的な失墜」を経験しました。しかし、その後のトリノは産業都市として勃興し、発展することになりました。産業博覧会や国際見本市を連催して産業振興に努める一方、有為な人材の発掘と育成、及び技術開発の核になる拠点としてトリノ工科大学（1908年）を設立しました。

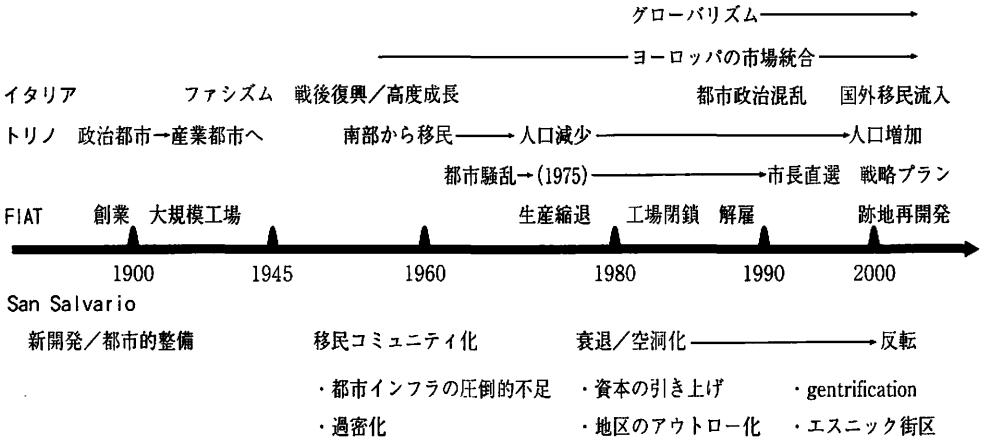
同じ時期に映画や出版、新聞などが起業し、トリノからそう遠くない都市圏内都市ではオリベッティが創業しました。特に出版事業では、第一次大戦後、トリノが雑誌都市として名声を得、ファシスト政権に対峙する政治的左派の拠点になりました。現在も市内にとても多くの書店があります。回廊に露店式の書店が立ち並ぶ風景は、その当時に由来しています。トリノはユネスコの「世界 Book 都市」に選定されています。

FIAT が創業したのは、ちょうどその時期でした。創業の地は San Salvario でした。FIAT は *Fabbrica Italiana di Automobili Torino*（トリノのイタリア自動車工場）の頭文字から取って付けられた社名です。その後の FIAT の成長は、トリノとの間で「FIAT によいことはトリノによく、トリノによいことは FIAT によい」という蜜月関係を構築しました。20世紀のトリノは、FIAT と命運を共にしてきました。

20世紀前半に、FIAT は市周縁部のリンゴット（フォードのハイランド工場に学ぶ）、ミラフィオリ（同ディアボーン工場に学ぶ、敷地100万 m^2）にフォーディズムの近代自動車工場を建設しました。工場の第一次郊外化でした。これに牽引され、工場に近いところに労働者団地が開発されました。ムッソリーニのファシスト時代には、政権と癒着して軍需を満喫しました。

戦禍は深刻でしたが、戦後復興期にマーシャルプランの40％弱を受注するなど、戦後も FIAT と政権の癒着が続きました。そして小型車「FIAT 500」をヒットさせ、「奇跡の高度成長」期に経営規模を拡大してグローバル企業になりました。同時に鉄道車両、航空機、金融／保険、メディア、各種サービスビジネスまで業容を広げました。そして強大なコングロマリットになりました。トリノでは、「街角を曲がるとピザ店があるように、きっと FIAT に関連

図表1 トリノ，San Salvario 小史



したビジネスに出合う」と言われてきました。政治、経済、そして文化やスポーツ活動の分野でもFIATの影響力は絶大でした。1950年代、市内の労働者の80％以上がFIAT、及びその関連企業で働いていました。

戦後のFIATの急成長を支えたのは国内移民労働者でした。しかし、急増する移民に都市政策は追いつかず、FIATが住宅、学校、病院、そして健康保険制度まで世話をするという状況でした。社会インフラの整備が遅延し、旧市街の周縁部では過密、そして社会的病理現象が表出するようになりました。San Salvarioでも社会資本の不足が深刻でした。元々イタリア南部に偏見を持っていたトリノっ子は、新住民（イタリア南部からの国内移民労働者とその家族）に反発し、地区内では社会的分断が深刻になりました。

1970年代半ば以降、グローバル化、ヨーロッパ市場の統合が向かい風になりました。そしてFIATは次第に競争力を失いました[7]。賃金カット、解雇……それに反対するストライキが続発しました。さらに都市騒乱が発生するなど、トリノ全体の社会状況が悪化しました。トリノの人口が120万人（1975年）に達し、ピークを越えたのは1975年でした。以降、右肩下がりで減少し、一時、90万人を割り込む縮小都市になりました。イタリア経済が苦境にあった1980年代には、各地でテロル、暗殺、爆弾爆発が頻発しました。

産業構造の転換という全体状況の変化（＝都市全体の地理的再編と伴走する）が、地区では深刻なコミュニティ問題として表出しました。トリノでも街に失業者があふれました。San Salvarioなど旧市街の周縁部では麻薬売買、売春などがはびこり、アウトロー化、スラム化が進行しました[8]。市財政は困窮し、収集されないゴミが風に吹かれて路上に舞いました。やがて〈資本の引き上げ〉が地区の衰退として顕在化し（Smith 1996）——修復されないボロ建物など建築環境の劣化、そして空き家、空き店舗などの「空き」が当たり前の風景になりました。

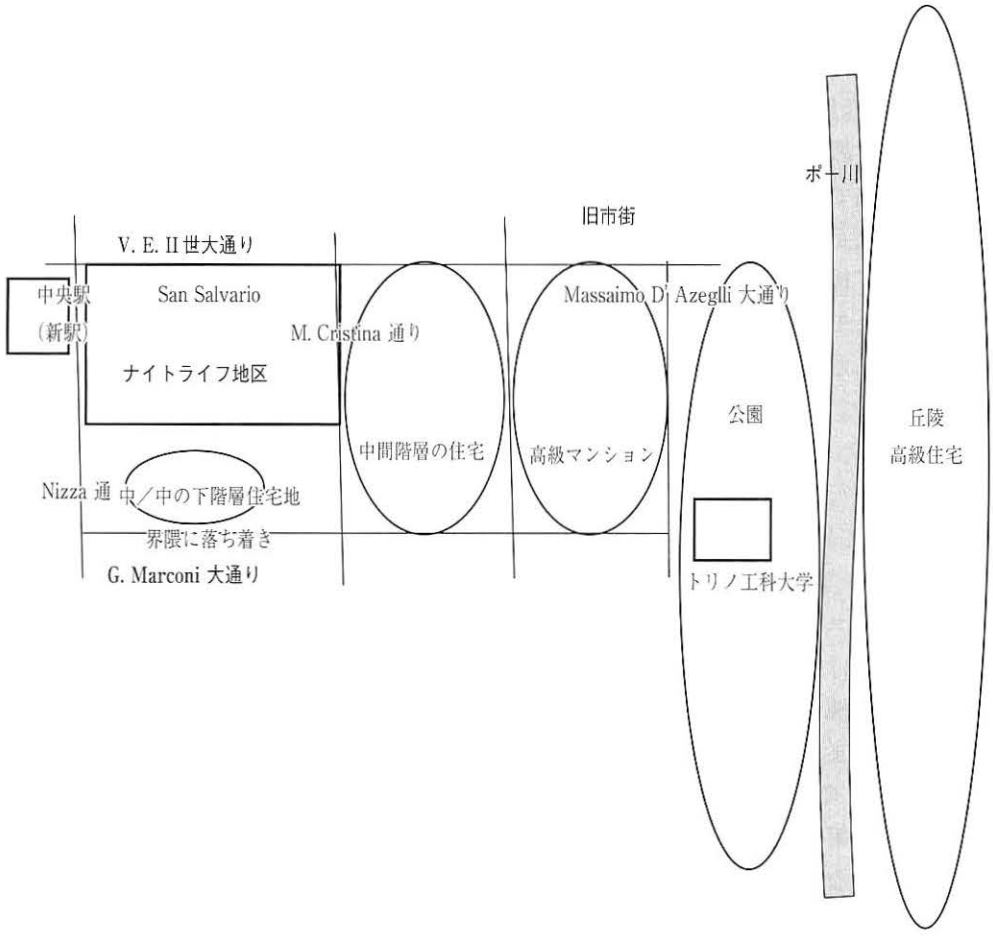
トリノの人口減少に歯止めがかかって反転するのは2000年前後です。この人口動態の変化は、トリノ政府がポストFIAT／ポスト工業化の都市戦略プラン1号を打ち出し、それまでの「FIATのトリノ」という都市イメージを転換する施策を展開するようになった時期と重なっています。都市のイメージ転換は、1）ソフト戦略——メディア攻略やイヴェントの連催など、2）都市再開発——物理的、建築的な都市環境の改変を通じて徹底されます。

2．San Salvario

San Salvarioは鉄道と並行して走るNizza通り、東はポー川沿いのMassaimo D' Azeglli大通り、北はVittorio EmanuelⅡ世大通りから南端はBramante大通りまでの範囲です。南北に2 km、東西に700 m。広さ1.4 km^2 です。ポー川を越えるとゆるい丘陵地になります。九十九折りの坂道沿いには、裕福層の暮らすヴィラが緑に埋もれるように点在しています。

トリノは19世紀中葉までサルディーニア王国

地図3　San Salvario



の首都でした。それでも小さな地方都市でした。1853年の都市マスタープランが市域拡張計画を決めました。その前後に城壁が撤去されました。城壁を壊し、その跡地がVittorio Emanuel II世大通りになりました。サルディーニア王国の国王の名前に由来する命名でした。統一イタリアの初代国王です。そのため他の多くのイタリア都市でも、目抜き通りは「Vittorio Emanuel II世」の名前を冠しています。

San Salvarioは城壁が撤去された後、Vittorio Emanuel II世大通りの南側に開発されました。それ以前は都市的整備がまったく行われておらず、農牧地か荒地でした。Porta Nuovaの建設がはじまったのもちょうどその時期でした。名前が「新駅」になったのは、駅開発された地区が新開地だったためでした。また、当時は蒸気機関車でしたから、「真っ黒い煙を吐くような異体は旧市街の外に置け」という事情もありました。

Vittorio Emanuel II世大通りの北側は旧市街です。大通りの南側沿道にネオゴシック様式のプロテスタント教会（The Waldensian Protestant Church）が建っています。イタリアではプロテスタントは長いこと暴力的な迫害を受けてきましたが、1848年に発せられた王令（その後、イタリア憲法の基礎になった）によってプロテスタントに対してもカソリック教徒と同じ市民権、参政権が付与されました。信仰の自由が認められたのです。その子弟に対しては、イタリアの学校で教育を受ける権利が保障されるようになりました。その時代に建てられた教会（1851-53年）です。近接してプロテスタント系病院や出版社、学校が建設されました。プロテスタント教会、そしてその関連施設を建てるのに、新開地のSan Salvarioは旧市街とは違い、旧弊に縛られることなく何事にも自由でした。San Salvarioには、4塔それぞれが絢爛たる装飾の玉ネギ型ドームを戴く、ムー

リッシュ様式のユダヤ教会があります。このシナゴーグも1880-84年に建造されました。また、地区内にイスラム教のモスクがあります。

San Sanvario が蒸気機関車など新奇なものを受け入れたり、異教徒に対して寛容だったりしたことは、新開地であったことが決定的に重要でした。そうした土地柄は、まるで DNA のように時代を越えて後の世に受け継がれました。そして次第に異質なモノ、あるいは外来のモノを受容する、そうした寛容な精神風土が育つことにつながりました。

San Salvario では、19世紀末から20世紀初めにかけて街路整備が行われました。5、6階建ての建物が連棟して建設されました。アールヌーボ時代と重なりましたから、イタリアンアールヌーボ（リヴァティスタイル）やウイーン分離派の影響を受けた装飾豊かな建物が建てられました。その幾棟かは街区の東側、及び南側にいまも残っています。

FIAT が創業したのは San Salvario です。19世紀末でした。次第に生産規模を拡大し、20世紀を迎えると間もなく拠点を市南部に移転しました。FIAT が最初の大規模工場をリンゴットに建てたころまでは、その労働力需要を満たしたのはトリノ都市圏、あるいはトリノのあるピエモンテ州内の地方都市やその田舎町の出身者でした。戦後復興期（1950-59年）から「奇跡の高度成長」期（1960年代）に FIAT の旺盛な労働力需要に応えたのは、今度は開発の遅れたイタリア南部からの移民労働者でした。イタリア南部発の、通称「太陽号」と呼ばれた夜行列車が朝9時50分に Porta Nouva に到着すると、長旅に疲れ、ぐったりした表情の移民労働者がプラットホームを埋め尽くしました。

戦後復興期（1950-59年）にナポリのあるカンパニア地方、半島の先っちょにあるカラブリア地方、それにシチリアから合計85,000人がトリノに移民しました。1960年代にはその数は3倍の、245,000人に膨れ上がりました。現在もトリノと半島のつま先の都市レッジョ・ディ・カラブリアや、ナポリの南にあるサレルノを結ぶ特急列車が走っています。南部からの移民労働者とその家族の「ふるさと便」になっています。

トリノを題材にした映画「いつか来た道」（監督ジャンニ・アメリオ　1998年）は、高度成長期のイタリアを舞台にシチリアから出てきた兄弟の葛藤を描いた物語です。物語は、Porta Nouva から大量の移民が吐き出される情景からはじまります。雨に沁みるトリノの街が美しい。映画の場面がそうだったように、プラットホームを過ぎ、コンコースを抜けて駅舎を出た移民はそこで右折れし、San Salvario に向かうのがふつうでした。San Salvario の安い駅前ホテルや木賃宿を、最初の止まり木にしたのです。その後は界隈の安アパートを賃貸するか、郊外（市周縁部）の FIAT に仕事が見つかれば工場に近い、市域南にある労働者団地に移り住むというのが一般的でした。

「駅に近い」「家賃が安い」「ゾーニングが混合用途」「歴史的に異質なモノの受け入れに寛容だった」ことなどが、San Salvario が国内移民の、そして世紀末にはイタリア／ヨーロッパ以外からの移民の、最初の滞留地になった理由でした。しかし、北部の人々は経済開発の遅れた南部を見下す傾向がありました。そのため南部からの移民が最初に到着し、集住するようになった San Salvario に対するトリノっ子の視線は差別的で冷たいものでした。同じように100年以上むかしも、旧市街に暮らすカソリック教徒は、プロテスタント教会やシナゴーグができ、新参の異教徒に寛容だった San Salvario に対し反感を懐き、差別的な、見下しの感情を抱いていました。その当時の San Salvario、そしてエスニックタウンになった昨今の San Salvario——その双方に対するトリノっ子の感情には通底するものがあります。

1980年代になって FIAT の経営がつまずきはじめると、たちまち「FIAT に都合の悪いことはトリノにも都合が悪い」状況になりました。実際のところ悪い話は、その都市の脆弱な地区に露出します。トリノの場合、San Salvario が劣化し、売春婦や麻薬の売人がうろつき、「もはや、窃盗などはニュースにもならないほど」治安が悪化しました。空き家、空き店舗が増え、家賃が下がりました。N. スミスの地代差額の

考え方によれば（後述）、San Salvario でジェントリフィケーションがおきる環境が熟成していった時期、ということなります（Smith 1996）。

その後、今度はクローバル移民の時代と重なり、San Salvario に東ヨーロッパ、アフリカ、イスラム圏から貧しい移民が流入するようになりました（ルーマニア、モロッコ、ペルー、エジプト、アルバニア、ブラックアフリカの国々など）。1980年代後半以降、世紀末に San Salvario のエスニックタウン化が急進展しました。そこでは、従来からあった零細商店がエスニックショップに駆逐されるということがおきました。

Monica Massari, *Ecstasy in the City: Systhetic Drug Markets in Europe*, Law and Social Change, August 2005 はアムステルダム、バルセロナ、トリノのドラッグ市場の研究です。トリノでは、①2000年前後はまだ、麻薬取引が常態化していた、②そこでは、伝統的なマフィア組織ではなく海外からの移民が売人になっていた――などを明らかにしています。当時の San Salvario のイメージは「4 D (danger decline decay drug-dealing)」に要約できました。しかし、エスニックタウンも2010年前後以降、急速にジェントリファイされ、今度はエスニック系の飲食店／物販店が排除されるようになりました。

以上が San Salvario 小史です。歴史的に San Salvario は、旧市街や Crocetta、ポー川沿い丘陵地のお金持ちからは「変なところ」「危なかし」「用事がなければ行かない（おそらく一生行かない！）」地区と見下されてきたのです。

3．Crocetta

Crocetta は Vittorio Emanuel Ⅱ世大通りの南側です。U字型を描いて走る大きな街路に囲まれた地区です。東側から Sacchi 通り、その続きが Francesco Turati、U字の底が De Nicol 大通り、西側が Mediterraneo 大通り、そして Castelfidardo 大通りが北西の角で Vittorio Emanuel Ⅱ世大通りと交差しています。Mediterraneo 大通り／Castelfidardo 大通りでは鉄道を地下に埋設し、その跡は路幅60 m の高規格道路に整備されました。路幅をたっぷり確保したプロムナードは、個性的なデザインの街路灯とストリートファニチャーが並ぶモダンな風景になっています（「Spina Centrale＝中央背骨地帯」と呼ばれれいる）。

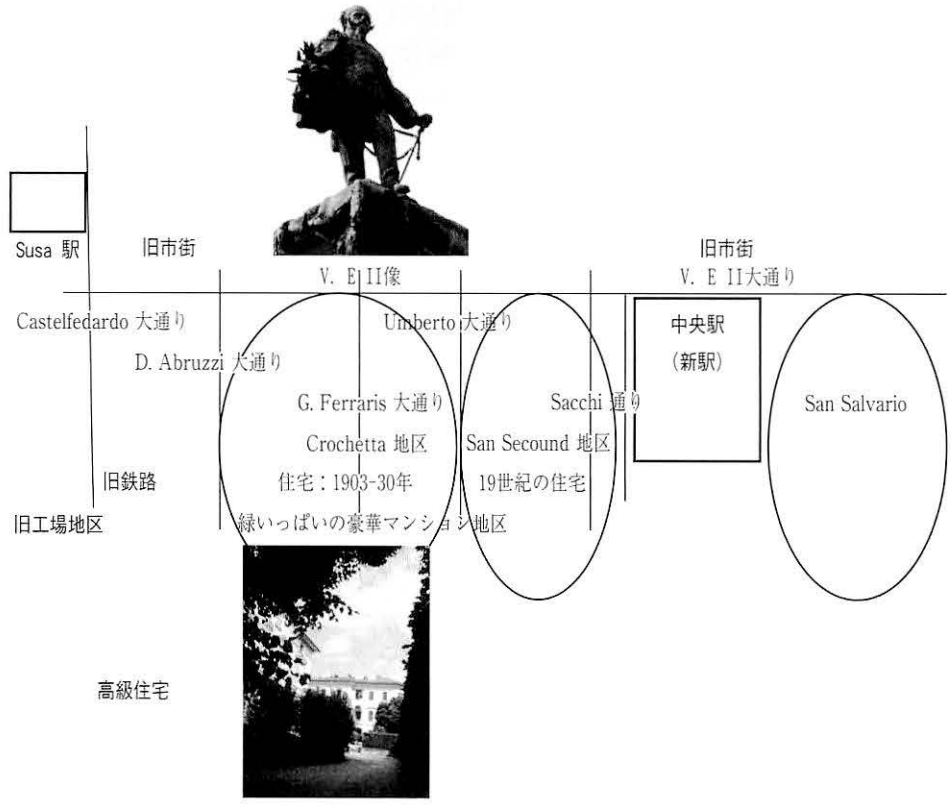
イタリア語で「Corso」はアヴェニューを意味します。Crocetta の場合、U字型の内側を13本の「Corso」が東西、南北に走っています。これらの大通りはトリノの都会性を象徴するように、いずれもきれいに整備され立派な並木道になっています。Umberto 大通りと Galileo Ferraris 大通りに並ぶポプラは、背丈が5階建て建物の窓辺まで届く高木です。お蔭で蒼々たる並木道になっています。

地区の北西には戸建ての豪邸が建ち並び、そのセンターにある Duca d' Aosta 広場からは放射線状に「Corso」が走っています（Duca degli Abruzzi、Trento、Duca、Trieste 大通り）。Duca degli Abruzzi 大通りを渡ると、モダニズム建築のトリノ工科大学の本部キャンパスです。近くにはトリノ近代美術館、GAM-近現代美術館、イタリアでは最大規模の銀行系財団（サンパウロ財団）の本部があります。界隈は文教地区になっています。

Crocetta は街区によって開発された時期が前後しています。Porta Nouva に近い San Second は、San Salvario に少し遅れて19世紀末期に開発されました。ネオゴチックの壮大な San Second 教会があります。街区の名前はその教会に由来しています。風呂場のない賃貸アパートが建てられたために、公衆浴場／洗濯場が San Second 通り沿いにつくられました。現在、その跡地は San Second 露天市場になっています。San Second 通りは、生鮮品を含む食料品から日用雑貨まで不便なく買い揃えることができる最寄り品型商店街です。それに対して Umberto 大通りの西側は、20世紀（1903-30年）に開発された住宅街区です。リヴァティスタイルやネオクラッシク様式の、豪華な装飾の建物が連棟し、市内では最上位に属する高級住宅街区です。

San Second から Vittorio Emanuel Ⅱ世大通

地図4　Crochetta



りを渡ったところに D' Azeglio 高校があります。市内の街角には「トリノ物語」という解説碑が立っており、教会や広場、公共施設の由緒を説明しています。D' Azeglio 高校の前にもそうした解説碑が立っています。解説碑があるくらいですからトリノの名門高校です。Crocetta の開発がはじまった19世紀末に創立し、100年の歴史を誇る高校です。

解説碑は「イタリア文学の批評家、特にダンテ研究の権威で反ファシズム運動に参加した Umbreto Cosmo、それに Leon Ginsburg（『ある家族の会話』などの作家 Natalia Ginsburg と結婚し、反ナチズム運動で獄死したロシア文学者）などが教師を務め、Cesare Pavese（『美しい夏』などの著作がある作家)、Norberto Bobbio（トリノ大学教授になった著名な政治哲学者）などが学び、卒業しました」と説明しています。D' Azeglio 高校の学校区になっていた Crocetta には、そうした子弟を育てる教養豊かな「中」、あるいは「中の上」の階層に属する家庭が多く暮らしていた（いる）のです。

Ⅱ．都市計画――政府の介入(1)

1．混合用途の都市マスタープラン（1853年）――San Salvario

Crocetta の中央を南北に抜けるポプラ並木のアヴェニュー、Galileo Ferraris 大通りが Vittorio Emanuel Ⅱ世大通りと交差するところに Vittorio Emanuel Ⅱ像が建っています。左右の揉み上げまで届くぶっ太い口髭を蓄え、顎をギュッと引いて正面を凝視する威厳たっぷりの立像です。「Largo」には「ゆったり堂々とした」という意味があります。地図などの表記は Largo Vittorio Emanuel Ⅱ像となっています。国王が没して20年後の、1899年に除幕式が行われました。Vittorio Emanuel Ⅱ世大通りや Porta Nouva から北に延びるローマ通りをイルミネーションで飾り、像の完成を祝ったといわれています。トリノっ子がサルディーニア王国の国王が統一イタリアの初代国王になったことを誇りに思い、建てた像です。

当時のトリノが Largo Vittorio Emanuel Ⅱ像

を、既に開発が進展していたSan Salvario側のVittorio EmanuelⅡ世大通りではなく、これから地区開発に着手するという段階にあったCrocetta側に建立したことは、時の都市計画（権力者）が両地区をどのように評価し、その将来を見定めていたかを考える上で興味深い事実です。

市域拡張計画を決めた1853年都市マスタープランは城壁を撤去し、1）San Salvario地区、3）北東部のポー川×San Maurizio大通り×Regina Margherita大通りに囲まれた三角地区を第一次市域拡張地区に指定しました。両地区とも街路は旧市街地の道路をそのまま延長し、グリッド状に計画されました。この市域拡張計画には、その後のSan Salvarioの「かたち」を決定的にする内容が含まれていました。ここで「かたち」は物理的、建築的な意味に止まらず、経済的、社会的な意味を含めて使っています。そして計画は、以後、San Salvarioの発展、衰退、そして変容に大きな影響を及ぼし、San Salvarioの「かたち」を規定することになりました。

まず、物理的な環境として路幅が狭く計画され、開発されたことです。地区内を走るアヴェニューは東西に2本（Guglielmo Marcori大通り、Dante大通り）ありますが、南北にはない。車社会の幕開けはもうしばらく時代が下がってからでした。そのため車の通過交通を考えて路幅の広いアヴェニューを通す、という計画にはならなかったのです。それ以外の道路はいずれも路幅がおよそ12 mです。そこに5、6階建ての建物が建ち並びました。それでも近代都市計画の黎明期に行われた市域拡張計画です――路幅12 mは産業革命以前の、隘路が蜘蛛の巣状になった都市とは違い、風通しや日射などの公衆衛生を配慮したものでした。一街区の広さは最も広いところで90 m×90 m。他は、大方、その1/2か、しばしば1/3以下です。狭いのです。

もう1つの都市計画は「建物の1階は原則的に商業用途にする」「住宅は2階以上」というゾーニングの採用でした。小売り、飲食、宿泊施設、あるいは職人の工房、機械工場、20世紀を迎えるとFIAT関連の工場、車の修理工場、印刷・製本工場……などが1階のスペースを埋めました。初めから「混合用途」を重視したゾーニングでした。すなわち、San Salvarioは蒸気機関車などの新しい文明や異教徒に対して寛容だっただけではなく、都市計画をめぐっても「混合用途」地区としてスタートし、「多様なもの／新規なものが入り込む余地が大きかった」「異質なもの対する受容性が高かった」のです。

1階は「混合用途」、2階以上は職人、商業者、産業化に伴って生まれてきた中間階層の住宅として使われました。したがって居住者も多様でした。20世紀後半には国内外の移民労働者が混住するようになりました。それでもSan Salvarioの住宅階は、1）個人所有比率が高く、2）ある特定のどの階層／職種の住民が他を圧倒するということもなく混住している（異なる時期の移民、多様な職業従事者、中の下／中／中の上階層）――という状態が継続しました。混合用途／多様な居住者は、経済社会状況が悪化した時期に「住宅価格の値下がり／アパート家賃の落下」を経験しながらもスラムに転落することなく、その途中で踏み止まることに貢献しました。また、高い持ち家率は、2階以上の住宅フロアでは住宅価格／家賃が安定し、ジェントリフィケーションがおきない背景の1つになってきました[9]。

2．単一用途の都市計画――Crocetta

当時のトリノ政府がPorta Nouvaの西側の新開地CrocettaにLargo Vittorio EmanuelⅡ像を建立したのは、この界隈を19世紀末以降に勃興してきた中間階層が暮らす、市内でも一等地の住宅街区に仕上げようとしていた意気込みと符合しています。半面、飲食店や町工場のあるSan Salvarioには、たっぷり髭をはやし、サーベルを下げた国王の立像は如何にも不釣り合いでした。

実際、Crocettaには高規格の、ポプラ並木のアヴェニューが縦横に敷設されました。そこには広い庭に囲まれた瀟洒な造りのヴィラ、精緻な装飾のファサード造りの5、6階建て集合

住宅が建ち並びました。計画がアヴェニューづくりに熱心だったのは、車社会の到来を思い描いていたためでした。同時に計画者には、車を所有することがふつうになる中間階層の住宅街区を開発するという目論見がありました。Crocetta では、「混合用途」は Porta Nuova に近接した、19世紀末開発の San Second に限られています。それ以外の街区では、「住宅単一用途」に純化したゾーニングが行われました。Crocetta が開発された時期は、単一用途主義の近代都市計画思想が隆盛してきた時代です。その影響があったと考えることができます。街区の単位面積も、San Second 以外は San Salvario に比べて広い。

イタリアのカフェはコミュニティの寄り合いの場になっています。そこで飲む一杯のエクスプレッソは、イタリア人にとってなくてはならない暮らしの必需品です。ところが Crocetta にはカフェが所々にしかない。当然、町工場などに出合うということもない。そういう性格の街区です。

Crocetta は20世紀を通じて「トリノの高級住宅地区」の名声を維持してきました。不動産の仲介情報誌（CASEMAGAZINE　2015年7月27日―8月30日号）は、トリノ市内を23地区に区分して「売り住宅」情報を掲載しています。地区ごとに掲載された物件の平均価格を計算すると、Crocetta-San Secondo の住宅価格は市内で3番目に高い。最高値は旧市街、次はポー川を越えた丘陵地の戸建て住宅地区です。イタリアではナポリなどの斜面地都市を別として、一般的に裕福層は旧市街に暮らしています。トリノでも旧市街の住宅価格が最高なのは、そうした事情を反映しています。丘陵地の宅地開発は戦後、特に高度成長期以降に急進展しました。

3．ジェイコブズの4条件

以上のように San Salvario と Crocetta では、その新規開発の段階で都市計画の考え方に大きな違いがありました。「混合用途に対して単一用途」「小ぶりな街区に対して広い街区」「高規格のアヴェニューが「少ない」「多い」」という物理的、建築的な「かたち」の違いです。この可視的な「かたち」の違いが経済的、社会的な「かたち」の形成にどのような影響を及ぼすことになったのかを考えることにします。

ここまで記述してくると、都市計画やまちづくりを勉強したことのある人ならば、近代都市計画思想を嫌悪し、ゾーニングの純化を徹底的に批判したジェイコブズの所説を連想すると思います。都市の魅力は未知の人々が集住し、協働を通して創造的な活動を生み育てる空間に具現します。ジェイコブズはそうした空間には「多様性を育む」4条件が備わっている、と述べています。「混合用途の必要性」「小規模街区の必要性」「高密度の必要性」「ふるい建物の必要性」です。

ジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』は、なぜあるコミュニティが繁栄し、他のコミュニティが衰退するのかを、徹底した路上観察を通して読み解く、という流儀で書かれています。4条件も「現場から考える」帰納的な考察方法から導き出されました。そしてジェイコブズは、ニューヨークのグリニッジヴィレッジこそ――彼女自身が暮らし、スラムクリアランス計画が明らかになった時には身体を張って阻止運動を闘い、大規模開発から守った――4条件をよく備えたコミュニティである、と考えていました。

1853年都市マスタープランは、新開地 San Salvario の開発方針として「混合用途」と「小規模街区」を重視していました。San Salvario は開発当初からジェイコブズの4条件のうち2条件によく適合していました。また、1) San Salvario の人口密度は市平均の4倍、2) ビジネスの立地密度は5.4倍――というデータが示しているように、市内でもっとも「高密度」な地区です。ジェイコブズの「高密度の必要性」の条件を満足しています。

地区内には様式建築が点在して残っているという話を紹介しましたが、San Salvario は「ふるい建物の必要性」という原則も相当程度に満足しています。知人の建築スタジオを訪ねた時に、ふるい建物でしたが旧式の、総ガラス張りのエレヴェーターが螺旋階段の中央を快走しているのに驚きました。地区内では Guglielmo

Marconi 大通り沿いに、唯一例外的に近代建築ビルが建っています。界隈に FIAT の関連工場があったために、連合軍が空爆の対象にしました。戦後、焼け跡に新しいビル街が開発されました。それ以外の街区は、大方、戦前、それも19世紀末―20世紀初期に建ったふるい、それほど立派ではない建物です。そのため家賃も安い。地区の中心に公設の公衆浴場がありましたが、そのことは内風呂（シャワー室）のない安い、住宅が多くあったことの証左です。

1)　San Salvario には『建築散歩』などの本に掲載されている華麗な様式建築だけではなく、安い家賃のふるい建物がある、2）開発当初から異物（蒸気機関車など文明の利器）／異教（プロテスタント＋ユダヤ＋イスラム）に寛容な気質を持ち、その DNA を継承してきた地区である――ことは、トリノの高度成長期／FIAT の業容拡張期にイタリア南部から職を求めてやって来る移民労働者を受け入れる素地が備わっていた、ということができます。そして20世紀末の、労働力移動がグローバル化した時代には、今度はアフリカ、そしてイスラム圏から多くの求職移民を受け入れることになりました。その結果、San Salvario は人種的に混在が進展し、極めて多様性に満ちた地区になりました。例えば、1）住民の外国人比率が26％（トリノの平均は14％）、2）外国人経営のビジネス比率は26.5％（同12.2％）に達しています

「混合用途」と小規模街区によって形成された街区は、出会いの機会を増やします。人々に賑わいを提供し、界隈性を高めることにつながっています。そして多様性を育みます。多様な人々を引きつけ、人々の間に新しい関係性を構築し、それが地区の経済的、商業的な繁栄につながります。しかし、ジェイコブズが1960年代の都市社会運動を通じて守ったはずのグリニッジヴィレッジは1970年代以降、急速なジェントリフィケーションに見舞われました。そして社会的排除を伴いながら、その相貌をすっかり変容させたことはよく知られています。貧しい移民や労働者、零細商店／飲食店は排除され、ファッションピープルが闊歩する高級ブランド店／レストラン街に「零落」しました。グリニッジヴィレッジを例示し、「資本はゆっくりと時間をかけてその野望（クリアランス）を達成し、結局、ジェイコブズは戦いに敗れたのではないか」と揶揄するメディアもありました。

既に述べてきたように「ジェイコブズの４条件」を満足している San Salvario ですが、San Salvario の20世紀後半史は、「街区に生気が漲り、活気に溢れたまちが育まれた」とは言い切れないものでした。FIAT の衰退と共に貧困が忍び寄り、ふるくなった建物は修繕されることなく放置され、アウトロー活動や犯罪が日常茶飯になりました。確かに現況は「改善」「活性化」が進展していますが、それでは全体として「望ましい状況」にあるか、となると話はそう単純ではない（後述）。現在の San Salvario はジェントリフィケーション／社会的排除の真っただ中にいます。また、ジェントリフィケーションが呼びおこす「賑わい」の裏面では、「空洞化」がおきています。さらに「賑わい」それ自体がコミュニティにトラブルを引きおこしています。

一方、ジェイコブズは単一用途のゾーニングはまちを単調にし、活力のないつまらない街区にしてしまうと論じ、「活動を殺し、街路を殺し、結果として都市を殺してしまう」「目に見える単調さやつまらなさは、その結果でしかない」と述べています。

単一ゾーニングの Crocetta の場合、San Second を除けば連棟する建物の１階で商売しているところは少ない。下階から上階まで基本的に住宅です。したがって街路景観（streetscape）は San Salvario に比べて単調です。また、閑静な住宅街区ですから昼間、人通りが少ない。夜になればなおのことです。San Salvario のようにナイトライフを楽しむ人々の喧噪が伝わってくる、というようなことはない。「小規模街区の必要性」「高密度の必要性」「ふるい建物の必要性」の３条件のいずれも満足していない。それでは「Crocetta では「街路が殺され、地区が殺されている」か」と考えると、そういう状況ではない。

車社会の到来を想定し、新開地に開発された Crocetta は「トリノの郊外住宅地１号」でし

た。しかし、ジェイコブズが毛嫌いし、D.リースマンが気怠さの漂い、孤独な群衆が暮らす場所として描いたアメリカの郊外住宅地とはだいぶ様子が違っています。ここでは路面電車やバスが縦横に走り、公共交通機関が重要な移動手段になっています。地下鉄駅が2ヵ所あります。なによりも大半の街区は、Porta Nouvaまで歩ける距離にあります。広場に露店市が立つことも「活動が殺され」「街区が殺される」ことにならずに、地区が健康を維持することに貢献しています。

元来、新開地でしたが、Vittorio Emanuel II世大通りを越えれば旧市街です。高級ブティックが並ぶローマ通りも徒歩圏内です。ダウンタウンから高速道路を30分以上も走ったところにあるアメリカの郊外住宅地とは違います。1週間分の食料品をショッピングセンターでまとめ買いをする、という立地ではないのです。庭付きの豪邸街区がありますが、大方はビル式の集合住宅です。上下階の近隣付き合い、あるいはコートヤード（中庭）でも付き合いがあると思います。そうしたことも庭付きの戸建て住宅が坦々と並ぶアメリカの郊外住宅地とは大きく違っています。

ある日の午前中のことでしたが、近隣公園は幼児連れの母親や祖父母で賑わっていました。だれもが知り合いという様子でした。地区内にカフェは少ないのですが、それでも街角にあるカフェに立ち寄ると近隣住民が頻繁に出入し、繁盛している風情でした。

Crocettaは新規開発されて以降、21世紀の現在まで経済的、社会的に「よく安定した住宅街区」としてその評判を維持してきました。初めから中間階層の住宅街区として開発され、その後、官民いずれかを問わず地区から〈資本が引き上げる〉というような空洞化現象はおきたことがない。したがって麻薬の売人や売春婦、強請りたかりをするチンピラが屯す「衰退地区」になったことがない。建物の壁面にグラフティーが描き込まれているという風景も見かけない。バンダリズムを経験したことがないのです。「衰退地区」になったことがないのですから、ジェントリフィケーションを経験するという状況に置かれたこともない。Crocettaはこの100年弱の間、建築的、可視的、そして経済社会的な「かたち」を変えることなく現在に至っています。

「ジェイコブズの4条件」は、ジャイコブズがニューヨーク、ボストン、フィラデルフィアを主に路上観察し、そこから帰納的に到達した理論仮説です。その意味ではアメリカ的な都市解説です。ヨーロッパとアメリカでは都心（旧市街）居住に対するこだわり方、持ち家比率、郊外のスプロールの仕方、衰退地区のスラムクリアランス……など事情がだいぶ違っています。それゆえに、「ジェイコブズの4条件」の機能の仕方に違いが出るのだと思います。

Ⅲ．都市再生——政策介入(2)

1．都市戦略プラン

マドリードやバルセロナで都市再生投資がはじまり、新たな道が切り拓かれることになったのは、フランコのファシズム政権の崩壊と都市政治の民主化が起点になりました。オリンピックを起爆剤にするなどバルセロナの都市再生戦略に学び、それに倣ったトリノの都市再生も、汚職政治が崩壊し、FIATと蜜月関係にあった都市政治が民主化されたことがきっかけになりました。バルセロナでもトリノでも、都市再生は民主化と伴走して始動しました。

トリノではポスト工業化は、ポストFIAT化とほぼ同義です。1980年代には製造業分野で雇用機会の劇的な喪失がおき、失業者が路上に溢れるようになりました。市内各地で治安が悪くなりました。ところが21世紀を迎えると状況が反転し、今度は都市圏、国内、さらには海外から来訪するツーリストを目当てにサービス、小売り、飲食関連ビジネスが市内各地区で繁盛するようになりました。この産業構造の変容は都市地理の総体を再編すると同時に、地区レベルでは新しい街路景観を造り出しています。ジェントリフィケーションです。San Salvarioはその典型的な事例になっています。

20世紀後半のイタリア諸都市は、汚職まみれの、腐敗政治の極致にありました。その反動が

1990年に地方分権を加速する力になり、都市政治の民主化がはじまりました。トリノでは市民が市長を直接選挙で選ぶ制度がスタートし、トリノ工科大学教授の V. カステラーニを市長に選出しました。カステラーニ市長が特に情熱を傾けたのは、トリノの「都市イメージ」を刷新することでした。1)「デトロイト色に塗り潰された」「煤煙がいっぱい」という工業都市の「都市イメージ」を破棄捨てること、そして、2) トリノの新しい「都市イメージ」を内外に売り込むことでした。実際、インタビューで面談した時に、カステラーニ市長は「当時のイタリア観光ガイドブックには、トリノを紹介するページがないものがあった」と失笑していました。

カステラーニ市長の熱い思いは、イタリア第１号の都市戦略プランにまとめられました。都市戦略プラン１号では、1) 歴史とか、文化とかを前面に打ち出し、2) ツーリストを引き付けるために都市マーケティングや都市ブランディング戦略を積極果敢に展開することが市政の重要課題になりました。都市戦略プランには規制力や拘束力はないのですが、都市が目指すべき方向や、将来ヴィジョンを提示しています。トリノの都市戦略プラン１号は、戦略的６領域／20政策課題／84行動項目で構成されていました。通覧すると「訪ねたい」「暮らしたい」、そしてトリノ製品を「買いたい」というニーズに応える、そのための都市戦略という意図が伝わってきます。製造業都市から消費都市への構造転換です。そこには、新自由主義的な都市思想を垣間見ることができます。

私はカステラーニ市長が打ち出した都市戦略プラン１号を、「トリノを再位置化する」戦略と表現することにしました。物理的、建築的なハードの「都市空間」、経済的、社会的なソフトの「都市空間」の再位置化です。新しい「都市イメージ」は、この２つの「都市空間」の交差上で決定されるはずです。

トリノが戦略プラン１号で目指した新しいトリノは、「これなのか！」とガッテンさせられる経験をしました。トリノ国際空港の荷物引き取りラウンジで印象深い壁面広告に出合った時が、それでした。壁面広告は「ようこそトリノに」と大文字で書かれ、キーワードを９つ並べていました。訪問客に対しこれらのキーワード関連産業が21世紀のトリノを牽引することになる、とアピールする広告でした。「文化、革新、チョコレート、歴史、芸術、ナイトライフ、映画、味覚、買い物」です。トリノのチョコレート史については以前から多少の知識があり驚かなかったのですが、それ以外はことごとくソフト関連産業です。換言すれば、「トリノはポスト工業化で先行します」という宣言でした。

キーワードの中で本稿と直接関係して興味深いのは、「ナイトライフ」と「味覚」です。トリノがフランス文化の影響を受け、市内に美味しいレストランが多くあるという話はよく知られています。ピエモンテ産ワインも有名です。後年になってからのことですが、スローフード祭が、隔年、トリノで開催されるようになりました。したがってトリノを表現するキーワードとして「味覚」は納得です。一方、トリノをイメージするキーワードとして「ナイトライフ」が列挙されていたことには意外性がありました。以下の引用を読むと意外性の事情をよく理解できると思います。

トリノ・フィルム・コミッション会長を務めたステファノ・カサに「1972年のある日の風景……」と書きはじめるエッセーがあります。

> 「街はとっても朝起きでした。５時には路面電車は通勤客で満杯になり、大路は職場に向かう労働者や従業員を乗せた車で渋滞しました。夜は早々と寝てしまいます。そのため23時過ぎまで営業しているピザ店は街に２店しかなかった」「街には色というものがないに等しく、薄らとスモッグがかかっていました」

FIAT やサンパウロ銀行の経営者、幹部社員が通う高級レストランが旧市街にあります。しかし、トリノは「労働者の街」でしたから、暮らしの基本は早寝早起きでした。ふつうの市民にはナイトライフを楽しむ、というような習慣はなかったのです。現在でも繁華街以外にある立ち飲み／ちょこっと腰掛けスタイルのバール

は、20時前には店仕舞してしまいます。

当時のトリノのまちの「かたち」は、謹厳実直なピエモンテ気風／労働者気質をよく具現化していました。それが最近は、トリノを表現するキーワードとして「ナイトライフ」が掲げられるようになったのです。トリノが都市戦略プラン１号を踏まえ、あるいは都市マスタープラン（1995年）、その他の都市政策などの政策介入を通じ、「ナイトライフ」を内外に喧伝しそれを自慢できる都市に変容してきたことを示しています。

２．商業活動規制の緩和

この項は、少々、閑話休題的な話題から書きはじめます。

イタリアでは旧市街の商業に賑わいがあります。それは地方の中小都市でも例外ではない。トリノに滞在中、心がけて中小都市めぐりをしました。トリノからローカル線で小１時間のところにあるオリベティ創業の町 Ivrea（24000人）は、オリベディの経営が傾いて以後、人口減少が顕在化し縮小都市になりました。しかし、週末に訪ねた中心市街地商店街はいっぱいの人混みでした。オレンジをぶつけ合うカーニバル「オレンジ戦争」が有名です。ミラノ中央駅から電車で20分のところにある、ふるい大学町 Pavia（68000人）の場合、その旧市街は半日歩きを満喫するのに十分な広さがあります。洒落たブティックやレストランが並び、ミラノにわざわざ出かけて行く必要がない、という充実ぶりでした。

ハムで有名な Parma（176000人）では、商店街が曲折しながら駅から歩くこと30分以上の距離まで延びています。狭い横道にもバールや店舗が張り付き、商業に面的な広がりがありました。ピサに近いトスカーナの海辺町 Viareggio（65000人）は、旧市街に常設の大きな露天市があります。そこを中心に商店街が縦横に延びていました。日本の地方都市の惨状と比べると、商店街の「かたち」に雲泥の差がありました。トリノとミラノの間にある稲作地帯の中心都市 Vercelli（47000人）、隣町の交通の要衝 Novara（105000人）の場合も、中心市街地商店街に空き店舗が散在する、というような風景にはぶつからなかった。どこの横丁にも活気がありました。

イタリアでは20世紀後半、中規模以下の都市では旧市街の疲弊が深刻でした。商業活動も衰退しました。上記の Pavia を訪ねた時に、1990年ごろの旧市街には空き家／空き店舗がゴロゴロあったという話を聞きました。大都市の旧市街地も空洞化がおきました。そのイタリアでは、法律で商業活動を規制してきたことが賑わい復活の基本ベースになってきた、ということを理解しておかなければならないと思います。また、1970年代以降は地方分権が行われ、都市政府が都市の「かたち」を転換するために商業活動の規制／緩和をテコにして〈資本の呼び込み〉を画策するになりました。本稿で扱う San Salvario のジェントリフィケーションはその事例に関係しています。

以下は、(宗田 2000) に学び、San Salvario のジェントリフィケーションに詳しい Magda Bolzoni（都市社会学専攻）に聴き取りし、同時に彼女の博士論文（Bolzoni 2013）を参考にしています。

イタリアでは1971-2008年の間、都市内を地区に分割し、地区ごとに商店の売り場面積を総量規制してきました。地区内の消費需要を商品部門別に予測し（人口、世帯、消費支出などをベースに)、その需要を満たすのに必要な売り場面積（＝上限）を示すという方法でした（以下、「店舗の総量規制」と記述)。地区内でその業種の売り場面積が需要を満たし、上限に達していると判断すれば、閉店が出るまで新規開店を認めないという制度でした。それが2009年に店舗の総量規制が廃止されました。また、2010年には営業時間規制が撤廃されました。政府が介入して地区商業の需給調整していたものを、その判断を「市場に委ねる」という新自由主義的政策に転換したのです。

店舗の総量規制を目指したこの法律は、地方分権がはじまった時代に制定されました。総量規制の具体的な内容を、それぞれの都市政府が決めることができました。そしてこの法律には適用除外規定がありました。都市政府が都市戦

略上の、あるいは地区活性化のためにその必要性／有用性を適切／合理的に説明することができれば、条例でゾーニングの内容を変更することができました。すなわち、規制を撤廃し、「新規開店自由」というゾーニング指定をすることができました。

実際、トリノでは衰退が顕在化し、街区が半スラム化しはじめた地区（Quadricatero Romano、Piazza Vittorio＋Murazzi del Po、San Salvario）では、1990年代末以降、店舗の総量規制と規制撤廃（自由化）が繰り返されました。経済活性化ゾーニングです。3地区はいずれも旧市街の中心商業地に近接しています。それらの衰退地区を活性化することができれば、中心商業地と空間的な一体性を強調することができるようになります。地区の更新を、都市全体の再編に結び付けることができます。都市戦略プラン1号は「空間の創造」を目指していましたから、衰退地区の経済活性化ゾーンイングは好都合でした。

以下のように説明し直すことができます。消費都市づくりを目指した都市戦略プラン1号では、ツーリストに受けのよいトリノを再構築することが戦略的領域の1つでした。絵画鑑賞／観劇するツーリスト（文化、芸術派）や博物館めぐりをするツーリスト（歴史派）が市内をもっと広く回遊するように、ナイトライフ、映画、味覚、ショッピングをエンジョイできる空間を豊富に提供することを目指す——その狙いを達成するために、1）新規投資を期待でき、2）旧市街に近接して立地に恵まれた地区のうち、3）衰退している地区を選び、店舗の総量規制ゾーニングを緩和しました。商業開発投資資金の誘い込みを狙ったのでした。

全市域で店舗の総量規制が行われていた時代に、上記の考え方に沿ってトリノで最初に規制が緩和され、新規店舗の開業が自由になったのはQuadricatero Romanoでした。1998年のことでした。1）ツーリストの来訪先を露天市場の外の街区まで広げる、2）それを呼び水に衰退した界隈の活性化を目指す——政策介入でした。Quadricatero Romanoではヨーロッパ最大規模の露天市（Porta Palazzo）が開催されています。今も昔も市場は集客力の強い観光スポットになっています。しかも、トリノで歩行者天国1号になった賑やかなGaribaldi通りまでは徒歩5分です。立地条件に素晴らしく恵まれています。

しかし、それまで以前は、市場から1街区外に出ると界隈は様変わりしました。トリノが縮小都市に転落した時期に界隈の治安が急速に悪化しました。貧しい移民が荒廃した集合住宅に過密に暮らし、住宅環境／インフラの劣化が深刻でした。アウトロー活動も頻繁でした。そのためEUの都市再生プログラム（Urban I、II）の対象地区になりました。モロッコなどイスラム系移民が集住し、エスニックタウン化も進行していました。

市域全体が店舗の総量規制の網を被され、お陰で行き場を失っていた資本が規制の壁に穴が開けられたのをきっかけに、一気にQuadricatero Romanoに流れ込むようになりました。トリノ工科大学講師のGiancalro Cotella（都市計画）によると、不動産投資に対して銀行が猛烈な融資活動をし、物件が高騰しました[10]。減価していた住宅の修復が行われ、ディナーの客単価が40-50ユーロに達する、中間階層相手のレストランやバール、それに土産物店、アパレルショップが相次いで新規開店しました。たちまちジェントリフィケーションを、可視的に確認できるようになりました。

同じ時期にPiazza Vittorio＋Murazzi del Poでも店舗の総量規制が撤廃されました。店開きを自由にできるようになりました。Piazza Vittorioは、マダム宮殿のあるPiazza Castelloに発する回廊造りの商店街Po通りがポー川と鉢合わせするところにあります。両方の広場ともトリノっ子に人気の広場です。そこからポー川沿いに連なっている街区がMurazzi del Poです。その意味では、この界隈も地理的な立地条件に恵まれています。

しかし、河川物流の倉庫などが集積し、トリノが衰退した時期にこの界隈も空洞化しました。規制の撤廃は衰退地区をポスト工業化風に活性化し、その活力を中心部の活性化に結び付けようという政策介入でした。トリノ市はゾーニン

ングを緩和すると同時に、公共所有のビルを売却したり、積極的に賃貸したりする施策を推進しました[11]。市とデベロッパーが連携する官民パートナーシップ方式の再開発プロジェクトが行われたのでした。ここでは、都市政府は空間開発の規制者ではなく、ジェントリフィケーションのエージェントになっていました。

政策の思惑通り、両地区にはライブハウス、カラオケバー、バール、クラブなどが短期間に開店しました。週末には喧騒が午前3時、4時まで続くようになりました。若者の間で「トリノでもっとも恰好いい（cool）場所」といわれるようになりました。トリノ市とトリノ＋トリノ都市圏コンヴェンション・観光局が発行している「トリノ旅行者マップ」は、Quadricatero Romano と Piazza Vittorio＋Murazzi del Po 地区を旅行者にご推奨の「ナイトライフ」スポットとして紹介していました。

その後、内外で新自由主義的な風潮が強まり、イタリアでも店舗の総量規制が2008年に廃止されました。ところが国の考え方とは逆に、トリノ市は2007年、市中心地区で新規開店を凍結する決定をし、2010年以降、都市計画に反映させました。この施策は訴訟されましたが2013年まで継続されました。Quadricatero Romano と Piazza Vittorio＋Murazzi del Po でも新規開店が規制されました。公共所有のビルをバールなどに賃貸する契約も破棄されました。両地区では新たにバールやレストランを開店することが難しくなりました。

両地区で店舗の総量規制を復活させた理由は表向き、歴史的な街区／街路景観を保全するためというものでした。しかし、両地区では競争が激しさを増したことに加え、特に Murazzi del Po では麻薬、売春などアウトロー活動が常態化し、風紀が乱れ、深夜まで騒がしく、強請などの軽犯罪が増え——そうしたことが市民の厳しい批判を浴びるようになっていました。実際はそれを理由に再規制することになったのです。

一方、San Salvario では店舗の総量規制／自由化をめぐって両地区とはタイムラグがありました。商業に関する規制法の適用から外れ、自由に新規開店できるようになったのは上記2地区に遅れ、2006年以降でした。そして2007年の、市の新規開店規制の決定では規制の対象外になりました。店舗の総量規制から外れ、新規開店の自由が継続しました。旧市街の外にありますが、San Salvario は地理的な立地条件に恵まれています。中央駅の Porta Nouva に隣接し、高級ブティック街の Roma 通りと隣合わせです。Piazza Vittorio＋Murazzi del Po の両地区で店舗の総量規制が導入され、行き場を失った資本が San Salvario に奔流の如く流れ込むようになりました。それは資本の動態としては、当然の理でした。以降、San Salvario で激しいジェントリフィケーションがおきました。その結果、San Salvario でも2013年に、再度、1年間に限定して新規開店が規制されました。

Ⅳ．バールナイゼーション

1．その（1）——気取った飲食街区化

San Salvario のジェントリフィケーションは、バールナイゼーション（Barnization）として進行しています。バールやレストラン、カフェが雨後の竹の子の如く、あちらの横丁、こちらの小径、あるいは広場の角にオープンし、界隈がたちまち少々気取った飲食街区化して「新しい中間階層」が来訪するようになりました。ここではそれをバールナイゼーションと呼ぶことにします。

これまでしばしば「バール」と書いてきましたが、路上観察した限りではバール、レストラン、カフェを業態区分するのは難しい。法律的に業態区分されているのか寡聞にして知らないのですが、一般的にバールは軽いスナックや惣菜を肴にアルコールを立ち飲みする酒場を連想します。しかし、実際はテーブル席を置き、レストラン並みの立派な料理メニューを用意しているバールがあります。早朝開店し、エクスプレッソやサンドイッチを提供しているところもあります。一方、カフェの看板を掲げていてもアルコールを出し、つまみに惣菜を並べているところがあります。イタリアの知人によると、バールは伝統的なイメージが強く、その使われ

方には界隈性（「コミュニティ空間」を共有する場的なもの）があるのに対し、カフェには少々気取ったイメージがある。フランスかぶれの響きがあるようです。保守的な南イタリアではバールがごく一般的とのことでした。

San Salvario でバールナイゼーションがはじまったのは、新規開店規制が撤廃された2006年以降です。特に Quadricatero Romano と Piazza Vittorio＋Murazzi del Po で政策介入が再転換（自由化⇒規制）し、それまで急展開していたバールナイゼーションに歯止めが掛って以降、San Salvario でバールナイゼーションが一気に加速しました。政策介入が変更され、資本の流れが変転したのです。

San Salvario でバールナイゼーションの起点になったのは Bertholet 通りと Goito 通りが交差する界隈でした。Bolzoni によると、界隈に最初のフレンチレストランが開店したのは2002年でした。周辺は当時、まだ荒れ果てていました。あちらこちらがアウトロー状態でした。ツーリストが来るような場所ではなかったのです。現在も同じ屋号でフレンチレストランの経営が継承されていますが、オーナーは二代目です。「先代は時代を先読みする感性に恵まれていました。でも、早すぎましたね。それで事業を手放すことになりました」と Bolzoni は話していました。

私が調査のためにトリノに通いはじめたのは2010年ころです。San Salvario を訪ねる度にまちの「かたち」が変わって行くのに驚きました。今度の滞在では地区のバールナイゼーションの実態を把握するために、バール、レストラン、カフェを数えて歩きました。バールナイゼーションが最も顕著におきている Vittorio Emanuele Ⅱ 大通り、Madam Cristina 通り、Guglielmo Macconi 大通り、Nizza 通りに囲まれた街区（400 m×600 m）にトルコ系のケバブレストラン、ジェラートカフェを含めて190店の飲食店がありました。

関係機関を訪ねて統計データを探したのですが見つからず、したがって「190店」をどのように評価できるのかその明確な基準がないのですが、ここではその手掛かりを１件紹介することにします。San Salvario のコミュニティ団体 San Salvario Local Development Agency（SSLDA）で戴いたパワーポイント（2014年１月制作）に、「地区内にはレストラン52店、バール／クラブ23店ある」と記されていました。合計75店です。パワーポイントの制作年月を考えると、直近でも2013年のデータということになります。また、SSLDA が San Salvario として地図に示している街区は、私が歩いて飲食店を数えた街区に比べてほぼ２倍の広さです。おおざっぱな計算ですが、２年前後の間に飲食店が250％以上増えたことになります。

件のフレンチレストランの隣で2012年以来、バール兼クラブ「ASTORIA」を経営している A. Maioglio は「（地下階はライブハウスになっている大きな店の）経営権を得て店を改修するために資金繰りに苦労することはなかった」と話していました。銀行は融資に積極的でした。San Salvario でも政府の介入（規制緩和が地代差額を顕在化させ）と金融の結託（＝集合的推進力）がバールナイゼーションを先導したのでした。「ASTORIA」の場合，店の改修費用に加え、飲食店経営のライセンス（金額は店舗規模に応じて決まる）を取得するために市に45000ユーロを支払いました。

バールナイゼーションの上昇気流に乗っかってビジネスチャンスを得た、新しいタイプの起業家です。トリノ大学（経済学）を中退し、幾度か起業を繰り返してきた40男です。大学で映画を勉強した同居人の E. Qualica が商売を助けています。２人共、こちらの聴き取り調査が不便することがないほど流暢な英語を話しました。

バールナイゼーションの客層はだれかということになりますが、伝統的な――Crocetta やポー川の丘陵地に住む中間階層ではない。ガイドブックに誘われて来るツーリストも多いのですが、それ以外は「新しい中間階層」と呼ぶのに相応しい人々が客層です。以下に紹介する話は、「新しい中間階層」を具体的にイメージするのに助けになると思います。

バール兼クラブ「ASTORIA」を経営している Maioglio と Qualica には兼業ビジネスがあ

ります。2013年以来、仲間5人（PR会社広報マン、グラフィックデザイナーなど）とイヴェント「San Salvario Emporium」を毎年6回開催しています。San Salvarioにスタジオを持って工芸品（ガラス、陶器、織物など）の制作やインダストリアルデザイン、ファッションデザインをしているアーティストに呼びかけ、地区内の市場スペースと街路1本を閉鎖し、そこを展示場にして〈Products Designed in San Salvario〉を即売するイヴェントです。「お客はだれですか？」と尋ねたところ、「衣料品を買うのにH＆MやZaraには行かないけれど、Roma通りの高級ブレンド店にも関心がないというタイプです。有名ブランドではないけれど個性的なデザイナーの、そうですね、しばしば地元デザイナオーが縫製した服を着たり、しつらえたりするのが恰好いいと考える人たちです。大卒以上です」という返事が返ってきました。バールナイゼーションの需要サイドを支えているのは、まさにこの集団に属する人々です。パリやミラノの高額なブランド品には関心が薄い。でも量産量販品は買いたくない、というタイプのファッションピープルです。

大方、決してリッチではない。グローバルマネーによる都市経済の再編はスーパーリッチに属するヤッピーを生み出しましたが、一方で高学歴にもかかわらず一時契約の専門職などに就いている不完全就業者（underemployment）をつくりだしました。San Salvarioのバールナイゼーションの客層はその階層と重なっています。San Salvarioのバールナイゼーションがリーマンショックと前後して急速に進行したことは、客層のタイプを考えると、そこには興味深い同時代性があります。

実際、最近のSan Salvarioでは、1950年代のアメリカンを彷彿とさせる店つくりだったり、黒を基調にしたシックな内装だったり——その差別化した店つくりが若者の間で「cool」と評判になっているバールやレストイランが相次いで開店しています。店の雰囲気や接客などの業態は、コミュニティ客に支えられた（community-based）伝統的なバールや、ソムリエのいる高級レストランとは違います。セルフサービスを基本にカウンターで飲み物／食べ物を注文してから席取りをする場合がふつうです。気取った店つくりですが、飲食代は旧市街やQuadricatero Romano、Piazza Vittorio＋Murazzi del Poにあるレストランに比べて安い。

たとえば、最近、トリノやミラノのバールではAperitivo（夜のハッピーアワーのメニュー：アルコール1杯＋惣菜の食べ放題＝しばしば20皿前後並ぶ、カフェテリア方式で皿に盛る）が評判です。Aperitivoを注文し、日没の遅い夏の夜を、あるいは秋の夜長をのんびりおしゃべりしながら楽しむことが「新しい中間階層」のナイトライフになっています。San Salvarioでは7、8ユーロでApertivoを注文できるのに対し、市内にあるトレンディな飲食街では10ユーロ以上取られます。高級レストランにはこのメニューはない。ここで紹介している「新しい中間階層」は、高級レストランの得意先客ではないのです。San Salvarioのバールナイゼーションは、そうしたライフスタイルの人々に絶好の場所と機会を提供しています。そしてSan Salvarioの「かたち」を激しく変容させてきました。

イタリアの集合住宅では、1階の扉に居住者／オフィスの名前を並べた名札が張り付けてあります。それを調べると入居率がどのくらいか、大方、推定できます。名前を伏して出していない世帯もあります。それを加算すると、調べた入居率よりも実際の入居率は少し高くなるはずです。San Salvarioにある20棟前後の集合住宅の名札を調べその入居平均を出したところ、入居率は80％を超えていました。入居／退去時の摩擦、及び名前を伏している入居者を考慮するとほぼ満室状態です。

しかし、リーマンショック後（San Salvarioでバールナイゼーションが急展開しはじめた時期と重なる）、2階以上の上層階にある住宅／オフィス家賃はむしろ値下がり傾向にあります。Guglielmo Marconi大通りに近いPrincipe通りの2階にスタジオを構えている建築家は「家賃の値下げ交渉をはじめるところです」と話していました。また、バール兼クラブ「ASTORIA」のMaioglioとQualicaは、最近、

San Salvario の一等地にあたる Madama Cristina 市場を眼下に眺める住宅ビルの最上階に転居しました。「地区の他のところから引っ越しましたが、お買い得値段でした」と笑顔で話していました。San Salvario の住宅市況に関してはイタリアのマクロ経済、及びトリノの経済事情を考慮して評価する必要があります。それにしてもバールナイゼーションの激しい San Salvario で住宅が値上がりしていない、という事実は重要です。住宅をめぐってはそれほど酷いジェントリフィケーションが起きていないのです。一方、1階の店舗の家賃は急激ではないのですが、這い上がるように右肩上がりで高くなっています。これは明らかにバールナイゼーションの影響です。

2．その（2）——路上駐車場／歩道の飲食店化

空きフロアや衰退した店舗をバールやカフェ、レストランに転換するバールナイゼーションに対し、San Salvario で急展開している別のバールナイゼーションについて紹介します。店の前の路上駐車場や歩道の一部を潰し、そこにテーブル、椅子を並べ飲食をできるようにする形態の——簡易型路上店舗が出現しています。路上駐車場／歩道のバールナイゼーションです。「簡易型」と書きましたが、パラソルを並べただけのお手軽タイプから鉄パイプでしっかり骨組みして屋根を掛け、そこにガラス壁を貼り合わせ、照明や暖房機器まで備えた立派な、全天候型／冬季も OK の常設タイプの路上店舗までいろいろです。そして路上駐車場／歩道のバールナイゼーションは、バールナイゼーション全体を加速する第2エンジンになっています。

路上駐車場／歩道のバールナイゼーションは、イタリアの他の都市、特に北イタリアの都市で見かけますが、Bolzoni によると、特に最近のトリノで際立っている現象です。確かにミラノやトリノ都市圏の中小都市にある旧市街でも見かけましたが、トリノに比べるとはるかに控えめです。路上駐車場／歩道のバールナイゼーションはトリノ発の現象、という説もあります。

路上駐車場／歩道をバールナイゼーションするためには、業者はその広さに相応した利用料



写真1　週末は深夜までナイトライフを楽しむ人々で賑わう一方，住民にはその喧噪が安眠妨害になっている



写真2　パーキングナイゼーションとバールナイゼーションのせめぎ合い風景——中央分離帯がガソリンスタンドと駐車場化　vs.　路上駐車場がバールに転用

をトリノ市に支払います。市にとっては貴重な新財源になっています。バール兼クラブ「ASTORIA」の場合、店先の歩道をバールナイゼーションし、テーブル9卓、椅子24脚を並べています。それで6-11月の利用料が800ユーロとのことでした。1月当たり150ユーロです。建物のフロアを借りた時の店の家賃と比べ、まずは相応の利用料です。歩道に比べて車道の路上駐車場スペースを転用する場合の方が利用料は高いという説明でした。歩道はそのままでは市の収入源にならない。一方、駐車料が発生する路上駐車場を潰して飲食店利用を認めるのですから、路上駐車場のバールナイゼーションの利用料を高く設定するという理屈でしょうか。

私が初めてトリノに調査に来たときの印象は、「うわぁ、道路も広場も駐車場化している」と

いう驚きでした。3車線道路の両側に駐車している、アヴェニューの中央分離帯が駐車場になっている、イタリア都市の魅力になっている広場が駐車でいっぱいになっている。何処もかしこも駐車する車で溢れているという印象でした。都市空間が酷いパーキングナイゼーションしている状態でした。ニーチェはトリノのまち歩きをこよなく愛し、トリノ滞在中に『この人を見よ』を執筆しましたが、彼が暮らしたAlberto通りに近いSan Carlo広場――「トリノの居間」と呼ばれているトリノっ子自慢の歴史的な広場が駐車する車に埋まっている写真を見たことがあります。「路上駐車はイタリアの文化です」という話を聞きました。イタリアでは路上駐車に課金することを禁止していた時代がありました。

英国のアーバンルネサンス政策を主唱した建築家のR. ロジャースが「都市が車で溢れる傾向は、自動車産業を支える人々や組織によって助長されている」と指摘しています。それを覚えていましたから、街区や広場が駐車場化している風景を眺め、「なるほどね、トリノはFIATの町なのでこの風景になるのは当然」と大いに納得しました。そしてその時の私の判断は、トリノでは都市空間が車によって占拠され、人間は隅に追いやられ、「生活の質」が車に阻害されているという否定的ものでした。

ところがトリノ通いをしている間に、私のトリノ評を変える風景を散見するようになりました。そして訪ねる都度、そうした風景に出合う機会が増えて行きました。車道の一部を路上駐車場にしていたところから車を排除し、今度はそこを飲食の場に転用する動きです。歩道にテーブルを2卓並べた小さなバールナイゼーション、車道にあった路上駐車場を潰し、60脚以上の椅子を並べた大規模なバールナイゼーションまで様々です。店内の椅子の数に比べてはるかに多くの椅子を並べている路上駐車場／歩道のバールナイゼーションも見受けます。

この路上駐車場／歩道のバールナイゼーションはトリノ市内全域でおきていますが、San Salvarioで特に顕著です。バールナイゼーションが最も進行しているVittorio Emanuele II大通り、Madam Cristina通り、Guglielmo Macconi大通り、Nizza通りに囲まれた街区(400 m×600 m)で路上駐車場／歩道のバールナイゼーションについて路上観察しました。カフェ、レストランの業態を問わず、店先の路上駐車場／歩道をバールナイゼーションする動きが広がっています。上記の地区では96店が路上駐車場／歩道をバールナイゼーションしていました。前述したようにこの地区には190店の飲食店があります。したがって60％の飲食店が路上駐車場／歩道をバールナイゼーションしていることになります。路上駐車場／歩道のバールナイゼーションの結果、San Salvarioのバールナイゼーションは全体として1.5倍に広がっていることになります。

路上駐車場のバールナイゼーションはアンチ・パーキングナイゼーションです。アンチ・パーキングナイゼーションが凄まじいスピードで進展しています。San Carlo広場から駐車する車が消え、後にパラソルが並ぶようになりました。ツーリストがパラソルの下でエクスプレッソを注文し、談笑するのはいい風景だなと思いました。また、路幅が12 mと狭い通りに路上店舗を押し込むと、車に占拠されていた時に比べて界隈性が高くなります。可視的には空間の質が「改善」します。イタリアの飲食店では蒸し暑い夏の日でも冷房を使うところは稀です。そのため夕刻、夜風を求めて路上のテーブルから席が埋まります。客が店内から路上に溢れ出て飲み食いしているという賑わいの風景は、「アウトローのSan Salvario」から「ナイトライフのSan Salvario」に地区イメージを更新するのに大いに貢献しています。当然、それは「ナイトライフのトリノ」という都市の全体イメージを再構成する重要な部分になっています。

V. ジェントリフィケーション

1.〈……化すること〉について

〈-zation〉〈-fication〉は、日本語では〈……化すること〉と訳されます。あることが転換したり、生じたりし、それが経済的、あるいは社会的、文化的に圧倒的、支配的な環境／

トレンドになることを意味しています。これまで述べてきたジェントリフィケーション(Gentrification)、パーキングナイゼーション(Parkingnization)、バールナイゼーション(Barnization)も同じです。

市内のごく一部の道路が路上駐車場に転用されたとしても、都市地理学がそれを直ちにパーキングナイゼーションとして研究対象にすることはない。1、2ヵ所の路上駐車場がバールに用途転換されても、それをバールナイゼーションとして俎上に上げて議論をすることはない。いずれの場合もより広い範囲に常態化し、社会にインパクトを与える段階の社会現象になったときに、〈-zation〉として研究対象になるのです。半面、過剰に〈……化すること〉がおきると、コミュニティから都市レベルまでいろいろな問題を引きおこすことになります。そこでは、だれが〈……化〉を牽引し、実際のところその受益者、費用の負担者はだれなのか——換言すれば、〈……化すること〉にまつわるステークホルダー間の関係性を明らかにすることが都市地理学の課題の1つになります。

2．公共空間の私有化

パーキングナイゼーションに衝撃を受けた私のトリノに対する印象は、その後、バールナイゼーションに遭遇し、「車から「人間のための空間」を奪還しはじめている」という肯定的なものに転換しました。社会には過度に進展した流れに対応し、そこから復元しようとする対抗力が内在しています。この場合、過激なパーキングナイゼーションに対抗する路上駐車場のバールナイゼーションがおきているという理解でした。

しかし、結局、私の思慮が浅かったのですが、聴き取り調査をしているうちに現実はそう単純な話ではない、ということがわかってきます。路上駐車場／歩道のバールナイゼーションがコミュニティに深刻な問題を引きおこしています。今度は路上駐車場／歩道のバールナイゼーションが過度に進行したためです。それに対する対抗と衝突です。

San Salvario では路上駐車場のバールナイゼーションが短期間に、しかも過激に進展しているために住民が駐車スペースを探すのに右往左往しています。19世紀後半に開発された San Salvario は、車社会を想定して開発されてはいない。そのため元来、駐車するスペースに事欠いています。5階建ての住宅に住む住民の大方が車を所有していれば、駐車スペースを確保するのは至難です。以前は中庭だったコートヤードは、いまは駐車場になっています。しかし、それだけでは足らない。そのため路上駐車場が激しくバールナイゼーションされるようになってからは、帰宅時に駐車スペースを探すのに30分以上も地区内を走行し、自宅から20分も歩かなければならないところにようやく駐車できたというような話が当たり前になっています。

Bolzoni は *What Tourists Ignore; Ambivalences, Conflicts and Compromises in a Changing Neighbourhood* (presented at the International RC21 Conference 2013) という興味深い表題の論文を執筆しています。そこでは、San Salvario で進行する路上駐車場／歩道のバールナイゼーションを取り上げ、「公共空間の私有化である」と批判しています。路上駐車場／歩道のバールナイゼーションは、市民ならばだれにでも平等に認められた権利ではなく、対面でバールかカフェ、レストランを経営している場合に限られます。道路という公共空間ですが、その利用は第三者には認められていない。排他的な権利になっています。確かにそれは、公共空間の利用をめぐって不公平です。

しかし、そうした批判にも「但し書き」を付け加えなければならないと思います。道路を市から借りて利用料を払って路上駐車することも「公共空間の私有化」と解釈することができます。バールナイゼーションはもっぱら金儲けのためですが、一方、営業車両を路上駐車しているパーキングナイゼーションも考えられます。したがって「両ナイゼーションの違いを言い立てることはあまり意味がない」という主張はあり得ると思います。

もう少し原則的な話に立ち返れば、マイカーに依存せずに公共交通機関をもっと積極的に利用するようにモーダルシフトを促し、過ぎたる

パーキングナイゼーションを是正すべしという議論になります。実際、トリノは地下鉄、路面電車、バス、それに都市圏鉄道など公共交通網がよく整備されています。そうなるとバールナイゼーションとパーキングナイゼーションを天秤に掛け、どちらがより深刻な「公共性の侵害」になっているのか、その判断は難しい。

3．公共空間利用をめぐる社会的不公平

バールナイゼーションとパーキングナイゼーションを比較する議論から離れ、バールナイゼーションが過剰化して「公共空間の私有化」をばく進させているという現実に注目すれば、ステークホルダー間に公共空間の利用をめぐって社会的不公平が生じている、という別の問題が見えてきます。

San Salvario では商業的ジェントリフィケーションがバールナイゼーションという姿を介在して進行し、空間利用が daylife から nightlife にシフトしています。その結果、夜間やウイークエンドには地区が「活性化」し、逆に昼間やウイークデーには空間利用が空洞化しています。「夜間がジェントリファイされ、昼間が社会的排除されている」と言い換えることができます。街区をめぐる繁忙時間のシフトは、空間利用の濃淡が1日のどの時間帯に再配分されるかの違いです。昼間に活動量が多かったものが減少し、活動量の少なかった夜間で増大しているという話です。したがって一日の空間利用の総量（＝活動の総量）が減らない限りは、昼間の空間利用が減ってもそれをもって直ちに都市空間が空洞化しているとは断定できない、という考え方があり得ます。しかし、そうした考え方は誤った客観主義、無責任な不可知論に陥る可能性があります。

そうではなく、地区の「改善」「活性化」などという抽象的な言葉に誤魔化されることなく、空間利用のシフトで実際に進行している現実を、眼を見開いて観察し、ステークホルダーの語ることに耳を傾ける、そうしてステークホルダー間の受益と負担の関係を賢察することが大切です。San Salvario ではそれぞれのステークホルダーが地区でどのように暮らし／働いているかに注目する。空間利用が昼間から夜間にシフトしていることに対する評価は、それぞれの立ち位置によって真逆になります。ステークホルダーの間に空間利用をめぐって社会的不公平が生じているのです。

ジェントリフィケーションが引きおこす「改善」「活性化」は、夜間の空間利用（nightlife）をめぐっておきています。荒廃していた建築環境／ランドスケープは修繕、改装投資が行われ、おしゃれなバールやカフェ街区に可視的に「改善」しています。また、夜間の通行人や飲食客は〈eyes on the street〉を増やし、夜間のアウトロー活動をしづらくしています。それは地区の治安の「改善」です。1階の空きフロアには新しいテナントが入居しています。店舗の改修、新規開店はトリノ市にとっては不動産税収のアップにつながります。飲食店を新たに開業するためには市に対してライセンス料を払います。それもトリノ市の貴重な財源になっています。新しい飲食ビジネスの開業は、不安定で低賃金労働ですが、それでも新しい雇用機会を生み出しています。いずれも地区の経済的な「活性化」です。トリノ市は21世紀のトリノを表現するキーワードとして「ナイトライフ」を挙げています。こうした「改善」「活性化」につながるジェントリフィケーションは、トリノの都市戦略に合致しています。

しかし、バールナイゼーションが過剰化しているために、地区の「改善」「活性化」とカッコ付きで語らなければならない矛盾がコミュニティに発生しています。矛盾は地区のステークホルダー間の軋轢／衝突になっています。

トリノに滞在中、午前中、昼過ぎから夕方、夜半から深夜、そしてウイークデー、週末に San Salvario の路上観察を繰り返しました。そこでは「改善」「活性化」する夜間の相貌とは対照的な風景に出合いました。午前中から午後5時過ぎまで人影が疎らです。特にウイークデーが酷い。Community-based のカフェや伝統的なバールの場合、早朝から開店し、通勤する人や散歩客が立ち寄り、界隈に賑わいをつくり出しています。しかし、San Salvario では昼間の人通りが減り、伝統的なバールに店仕舞い



写真 3　昼間はシャッター通りに変貌する

をするところが出ています。一方、バールナイゼーションを引きおこしているバール、カフェ、レストランの多くはナイトライフ客を相手にしています。そのため19時、20時まで店を開けない。ウイークデーは閉店し、「週末も21時以降、午前 4 時まで限定して営業」という特殊な業態のバールも珍しくない。そうした飲食店はウイークデーの昼間はシャッターを下ろしたままです。

昼間の街区がシャッター街に急速に変容しています。バールナイゼーションによって人々の活動の重心が昼間から夜間にシフトすると、その影響は他の業種業態に及びます。夜客相手のバールが集積している界隈にある書店は、夜の賑わいをつくるアーティストや学生好みの本や雑誌を並べ、営業時間を18時から深夜に変更しました。ベーカリーも朝の開店時間を遅らせ、夜まで営業しているところがあります。午後から開店という理髪店があります。昼間の人通りが激減したために店仕舞いに追い込まれる業種業態の商売があります。空き店舗が発生するとそこがさらにバールナイゼーションされる、という循環がおきています。「夜間がジェントリファイされ、昼間が社会的排除されている」ことに対しては、従前からの住民の間に「暮らしが不便になった」と不満が鬱積しています(Bolzoni 2013)。

San Salvario を路上観察していると窓辺に掛けられたオレンジ色のバーナーが目に付きます。そこには「Sleeping to work」「Sleeping to dream」「Sleeping is a need」などと書かれています。バールナイゼーションの結果、深夜から早朝まで続くようになった喧騒に対し異議申し立てするバーナーです。「静かに寝る権利」を訴えています。確かに路上駐車場／歩道がバールナイゼーションされ、そこに60脚も椅子が並び、気分の高揚した飲み客が大声でおしゃべりするのですから騒々しい。大声が石壁造りの建物に反響し、上層階でも煩い。店内で大きな音響でジャズを掛けているバールもあります。その音が街路に漏れてきます。イタリアでは蒸し暑い夏でも冷房を使うことは稀です。したがって「騒々しければ窓を閉めて寝ればいいでしょう」という反論は理解を得難い。

ところがオレンジバーナーが掛けられてからしばらくし、今度はごく近隣の窓辺にブルーのバーナーが掛けられました。そこには「I love San Salvario, its youth, its voices and its music」と書かれています。「San Salvario のバールナイゼーションは大いに結構じゃないですか」とアピールするバーナーです。おそらく San Salvario のバールナイゼーションで経済的な利益を得ているステークホルダーがオレンジバーナーに反発して窓辺に掛けたバーナーです。

図表 2． バールナイゼーションの実相

	Users	Needs	Community-based
Day Space	住民　零細事業者	暮らしの必需	常住
Night Space	来街者 起業家　飲食企業	快楽的消費	一時滞在

住民：高齢者、子供を含む全年齢層、中／中の下の住民（国内外移民労働者）、学生
零細事業者：商店、職人、小規模工場経営者
来街者：旅行者、地区外からの飲食客／学生
起業家：新しい飲食店経営者
暮らしの必需：買い物（食料品、日用雑貨）、通勤通学、散歩
快楽的消費：外食、レジャー

（表）は昼間と夜間の空間の利用者（users）がだれで、どのような使い方をし、地区とのかかわりの深さがどうなっているかを整理したものです。夜間の空間利用がジェントリフィケーションをおこし、昼間の空間利用が空洞化している――その実相は、1）地区の一時滞在者が常住者を、2）快楽的消費需要が暮らしの必需を、それぞれ排除しているという構図です。その構図には公共空間の利用をめぐって社会的不

公平を読み取ることができます。一時滞在の、夜間空間の利用者は「新しい中間階層」に属する人々です。そして夜間空間の利用者は「暮らしの必需」、あるいは「静かに寝る権利」をSan Salvarioとは別の、彼らが常住しているところで充足させているはずです。逆に常住者が「暮らしの必需」を満たす機会、「静かに寝る権利」を奪われています。

Ⅵ. 見えてきたこと

工業化社会では、都市地理学は距離に関心がありました。工場と港湾、鉄道などとの近接性、消費地までの距離、原料産地に近いことの優位性、あるいは労働力の供給地への遠近――などが検討されました（工業立地論）。フォーディズム的な資本主義的生産の効率性に関心がありました。また、都市の中心性の意味、そして経済的諸活動と都市的機能／施設が中心とどのような距離関係にあるかなどが議論されました（中心地システム論）。都市の競争有利性はそうした距離との関係性を通して考察されました。

それに対してポスト工業化社会の都市地理学では、「空間の生産」「空間の消費」「空間の創造」などが中心議題になっています。創造階級の台頭を論じたR. フロリダの都市論は「空間の消費」「空間の創造」につながる議論です。フロリダの考える創造階級はジェントリフィケーションを先導する「新しい中間階層」と一部ダブっています。そして彼らを引きつける魅力に満ちたQOL（生活の質）＋QOW（仕事の質）を備えた都市が都市間競争を制する、という考え方です（Florida 2008）。City-marketing、City-branding、あるいはPlace-makingなどの考え方も同じ文脈で語られています。就業者、居住者のQOLだけではなく、旅行者や買い物客なども呼び込める、高いQOLを備えた「空間の創造」です。そこでは（社会的排除などを見据えながらも）ジェントリフィケーションによる地区の改善／再活性化、美化、浄化などを前向きに評価する傾向があります。

ジェントリフィケーションに関しては当初、北アメリカ、及び英国の都市研究で主に話題になってきました。それが1980年代末期ごろからは、世界の先進諸国都市で共通して観察されるゆえに、グローバリズムを思考する枠組みの中で考えなければならない現象である、と主張されるようになりました[12]。ジェントリフィケーションの点描写に傾注する、それまでの問題意識を更新することの必要性が提起されました（Smith 1996）。その際、研究のアプローチをめぐり、「空間の生産（production-side）」――経済的、政治的側面を重視するマルクス主義の分析手法、逆に「空間の消費（consumption-side）」――ポスト工業化社会が創出する新しい職種階層の台頭（「新しい中間階層」）、そのライフスタイルの変化を反映した居住選好――を重視する立場の分析手法、その間で論争がおきました。長い論争を通じてジェントリフィケーションをめぐる分析手法が深耕されてきました。

「空間の生産」としてジェントリフィケーションを解読しようとした主唱者のN. スミスは、ジェントリフィケーションは不動産（土地、及び家屋）市場の変容が引きおこす空間の再生産である――したがっていわゆる「都心回帰運動」の主役はアーバンパイオニアと呼ばれる一群の人々ではない。そうではなく資本の回帰運動こそが「都心回帰運動」の立役者であると主張しました。そして、そうした立役者は金融資本、デベロッパー、政府などの「集合的推進力（矢作の造語）」として立ち現れると論じました。

San Salvarioのジェントリフィケーションの現場で〈集合的推進力〉になっている都市政府、そして金融資本もジェントリフィケーションの受益者になっています。スミスは、ジェントリフィケーションを通じて進む衰退地区の「改善」と都市更新プロジェクトとして取り組まれる大規模都市再開発を別物として取り扱う理由は何処にもなく、同じ事情を背景に、同じアクターが躍動していると述べています（Smith 1996）。

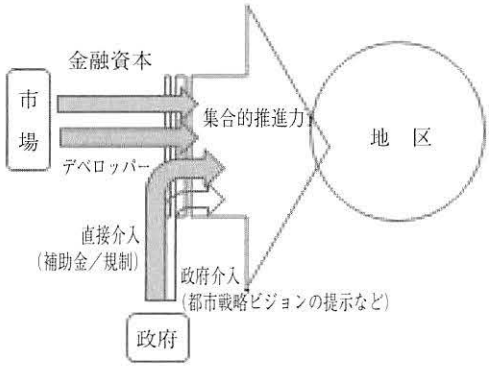
双方をめぐる都市空間の変容をめぐっては、ポスト工業化（＝資本の引き上げ）をきっかけに、そしてグローバル化を背景にして放出され

た空間に政府が介入し、金融機関がカネを貸し込む「集合的推進力」が稼働して進行しています。製造業の衰退した都市の都市政府は新しい都市型産業を育成し、ポスト煤煙型の都市イメージを構築することに躍起になっています。それに伴走して金融機関は「都市再生」を歌う空間開発／産業開発に余った資金を貸し込むことに必死です。

トリノでは20世紀末以降、市域を分断して走っていた鉄道を全長16 km に渡って地下化し、その跡をプロムナード化する大規模都市再開発が進展しています（Spina Central Project＝中央背骨地帯プロジェクト）。鉄道沿いにあった工場を、劇場を併設したショッピングセンターやトリノ工科大学の学舎、イヴェント会場に転換する一方、工場跡地に研究開発施設（映像系、環境系、IT 系など）や集合住宅を建てる都市更新プロジェクトです。産業構造の転換で不要になった FIAT やその関連企業の建物を撤去や衣替えし、その跡に知識集約型都市＋買い物などの消費産業都市を実現する都市更新プロジェクトは、トリノの新しい「かたち」創りを謳った都市戦略プランの具現化です。空港にあった広告板が挙げていたキーワードのうち、「文化、革新、歴史、芸術、映画、買い物」を体現しています。

San Salvario と Spina Central をめぐるトリノの都市空間の変容は、その意味でまさにスミスの理論仮説に沿っています。産業構造の転換によって引きおこされる都市地理全体の変容を構成する一部になっています。

図表 3．　ジェントリフィケーションをおこす集合的推進力。（Smith 1996）を参考に筆者が作成した。



スミスは、ジェントリフィケーションをめぐって地代差額を論じています。資本の引き上げによって建築環境が劣化したまま放置された地区が相当程度衰退し、衰退した状況を反映する「実際の地代」、及び界隈の「潜在的可能性を映ずる地代」――その間に格差（実際の地代〈潜在的可能性を反映する地代）が生じます。そして地代格差が十分に拡大した時に建築環境を改善する再活性化（ジェントリフィケーション）投資がはじまる、と説いたのでした。同時にそこでは、労働者階級や零細商工業者の立ち退き（displacement）がおると指摘し、ジェントリフィケーションの階級的、人種的な性向に注目しています。

「空間の消費」サイドを注視してジェントリフィケーションを読み解こうとする研究グループ（新古典派経済学の系譜＝Smith 1996）は、ジェントリファイヤー（ジェントリフィケーションを引きおこす人々）の〈ライフスタイル／消費選好の変化〉が都市空間をどのように変容させるか／消費選好の変化が空間の変容にどのように表出しているか――に関心があります（Ley 1996）。ジェントリファイヤーはポスト工業化社会に躍り出た「新しい中間階層」――金融、サービス業、文化産業などに従事する高学歴層です。あるいは子育てを終えた後、平凡で刺激の乏しい郊外暮らし（Riesman 1964）を唾棄し、都心や都心周縁部に暮らすことを選択した人々です（DINKS＝Double Income no Kids　共稼ぎ世帯、Empty-nester＝子育てが終わって巣が空になった世帯）。

アメリカ、英国のアングロサクソン系都市に比べてヨーロッパ都市ではジェントリフィケーションが一般的に「穏やか」である、という指摘があります。その違いには、① ヨーロッパでは、社会民主的な政府の関与が大きい／持ち家率が高い／人々が旧市街居住に対して強いこだわりを持っているのに対し、② 移民社会の「アメリカの精神」は「場の移動」によって経済的、社会的な成功（アメリカの夢）が実現すると考え性向が強い（斎藤 1981）――などが影響していると考えられています。アメリカでは、「場の移動」を繰り返す傾向が居住の郊外

化を促進し、都心／都心周縁部の衰退を引きおこし、半面、居住空間のジェントリフィケーションの強力な起爆剤になっています。

今般のトリノのジェントリフィケーションをめぐる調査は商業ジェントリフィケーション (commercial gentrification = Bolzoni 2013) ——衰退地区（San Salvario）にある界隈がおしゃれな飲食店街に転換されることによっておきる地区の変容についてでした。San Salvario の場合、建物1階の商業フロアをめぐっては家賃格差（旧市街などに比べて安い）が生じ、商業フロアをめぐってジェントリフィケーションがおきています。そこでは確かにスミスが説く、ジェントリフィケーションを主導する「集合的推進力」を読み解くこともできます。半面、2階以上にある住宅フロアでは、ジェントリフィケーションはおきていない。

一方、San Salvario のジェントリフィケーションで語られている「新しい中間階層」は、アメリカのジェントリフィケーションで語られている経済的に恵まれた高学歴層とは違っていました。高学歴ですがそれほどリッチ（金持ち）ではない。むしろ不安定雇用に就いている風情の若い世代が目立ちました。San Salvario で観察される「新しい中間階層」については「大学は卒業したけれど……」というヨーロッパ的な若者労働市場の状況、特に不活発なイタリア経済との関係性をもう少し深堀することが必要になると思いました。

注

1) ジェントリフィケーションは英国の社会学者ルース・グラスが考案した表現である (Glass 1964)。そこでは、ロンドンのそれまでの労働者居住区に中間階層が流入し、ふるびたアパートが賃貸契約の更新期を迎えるとその後、しゃれた高級住宅に改築され、安宿なども宿泊料を引き上げ、その結果、元々そこに暮らしていた労働者が立ち退きを迫られるようになる、と記述していた。使われはじめた当初からジェントリフィケーションという言葉には階級的な意味が含まれていた。

2) N. スミスは、ジェントリフィケーションは「都市中心部の景観の階級的改造」であり「より広大な都市再編」に深く関わる地区の変容である、グローバリズムの枠組みの中で理解すべきであると指摘している。したがって「かつての古き袋小路や路地がもっていた優雅な歴史の回復に限定して解釈したりすることは、いまとなっては時代錯誤だといえるだろう」と述べている (Smith 1996)。

3) Bolzoni はその個人的な体験の記憶として、2007年当時の San Salvario には廃車や空き瓶が路上に放置され、清掃などされず、危なっかしいという印象を持ったという (Bolzoni 2013)。

4) そこに佇む人々を衰退地区の荒廃、粗野な建築的な風景と同列に並べてしまい、物的な風景の一部／「社会的」と呼ぶに値しない存在、としか見ないという傲慢さがある (Smith 1996)。同様に「アーバンルネサンス」という言い方には、「暗黒の中世」からに抜け出し「地中海の陽光が差すルネサンス」というイメージがあるが、中世が丸ごと暗黒だったわけではない。J. ジェイコブズは救い難いスラムと見做されスラムクリアランスの対象になるところには、実際は濃密な、豊かな人間関係があると説いている (Jacobs 1961)。

5) アメリカや英国では金融革命とグローバリズムが生み出す高学歴で高所得を稼ぐ専門職の就業者——しばしば「ヤッピー」の意味で使われるが、トリノ、特に San Salvario のジェントリフィケーションを牽引する新しい中間階層は高学歴だが、不安的な就業の、暮らし方に新しい感性を持った——その意味で伝統的な中間階層と区別される人々である。

6) Bolzoni はトリノ大学学部生時代には旧市街にシェアハウスし、San Salvario に足を踏み入れたこともなかったと書き、21世紀に入って間もなくのころには studentification がおきていないかったことを示唆している (Bolzoni 2013年)

7) 政府の地域開発の方針に沿って FIAT はイタリア南部に生産基地を開発し、グローバル化の時代を迎えると途上国、ロシアに工場投資をするようになった。トリノの地盤沈下が進行した。1980年代には FIAT は生産を縮退し、工場閉鎖に向い、下請け工場なども閉鎖されるようになった。

8) 都市周縁部（インナーシティ）が衰退し、荒廃する状況をアメリカでは「都市がフロンティア化する」としばしば表現する。アメリカの「西部開拓」になぞられての言い方であり、ヨーロッパでは使われることがない。

9) イタリアは持ち家率が高く世帯ベールで72.1％が持ち家居住、18％が賃貸住宅居住である (2011年) (Bolzoni 2013)。

10) だれがジェントリフィケーションを始動させるのかをめぐって個々人（アーバンパイオニア）の消費選好を重視する新古典派経済学的な解釈を批判し、N. スミスは「土地市場の規制の撤廃」(地代差額を生み出

す政府の介入）と金融資本の結託――〈集合的資源〉がジェントリフィケーションを先導するのであると主張している（Smith 1996）。

11）「国家や自治体は、不動産を「公正市場価格」でかき集め、より低額の査定価格でデベロッパーに差し戻すことで、資本の価値摩損の最終段階にかかる費用を負担し、仕上げをほどこした」――そうした「政府の介入」がなければ再生も再開発もおきなかったようなエリアでジェントリフィケーションがはじまる（Smith 1996）。Murazzi では政府が市場価格以下の価格で売却や貸し出しを行い活性化がおきたが、「それがなければ再生」がおきなかった地区である。

12）「（ジェントリフィケーションに対して）共感的な人々の多くは、「ジェントリフィケーション」という階級的でもあり人種的でもあるコノテーションをはぐらかすために――「近隣の再活用」や「格上げ」「ルネッサンス」といった――より柔和な用語に訴えかけたが、「ジェントリフィケーション」という用語が見た目にもつ楽観主義、すなわち白人のミドルクラスによる近代化、再開発、都市の浄化といった語感に魅惑された人々もたくさんいた。というのも、戦後の中心市街地に対しては、資本の引揚げ、荒廃、崩壊、病根、「社会的病理学」といった修辞学が、先進資本主義社会のいたるところで増幅されていたからだ。この『衰退の言説』（Beauregard 1993）は、おそらく衰退とゲットー化という現実の経験にあてはまるものであったがゆえに合衆国でもっとも深刻なものであったけれど、一方では〔先進資本主義国のいたるところで通じる〕幅広い適用性と訴求力をもっていたのである（Smith 1996）

〈参考文献〉

B. Beauregard, *Voice of Decline: The Postwar Fate of US Cities*, Oxford: Basil Blackwell 1993 (The Second Edition, Routledge 2003)

M. Bolzoni, *A Neighbourhood on the Move; Commercial Gentrification, Social Inclusion, and Urban Change in Turin, Italy*, Doctor Thesis, University of Turin 2013

M. Bolzoni, *What Tourists Ignore; Ambivalences, Conflicts and Compromises in a Changing Neighbourhood* (presented at the International RC21 Conference 2013)

M. Brizzi/M. Sabini (edited), *The New Turin*, Kent State University 2011

R. Florida, Who's Your City ?, Basic Books 2008（井口典夫訳『クリエイティブ都市論――創造性は居心地のよい場所を求める』ダイヤモンド社　2009年）

R. Glass, "Aspects of Change, London": Centre for Urban Studies (ed.), McGibbon and Kee 1964

J. Jacobs, *The Death and Life of Great American Cities*, The Randam House Publishing Group 1961（山形浩生訳『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会　2010年）

D. Ley, *The New Middle Class and the Remaking of Central City*, Oxford, Oxford University Press 1996

M. Massari, *Ecstasy in the City: Systhetic Drug Markets in Europe*, Law and Social Change, August 2005

R. Richard/A. Power, *Cities for a Small Country*, Fber and Faber Limited 2000（太田浩史他訳『都市　この小さな国の』鹿島出版会　2004年）

D. Riesman, *Abundance for What ?*, Doubleday & Company 1964（加藤秀俊訳『何のための豊かさ』みずず書房 1968年）

N. Smith, *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City*, Routledge 1996（原口剛訳『ジェントリフィケーションと報復都市―新たな都市のフロンティア』ミネルヴァ書房　2014年）

斎藤　眞『アメリカ史の文脈』岩波書店　1981年

宗田好史『イタリアのまちづくり―歴史的景観の再生と商業政策』（学芸出版社　2000年）

矢作　弘『縮小都市の挑戦』（岩波新書　2014年）

＊龍谷大学在外研究制度（短期）の成果です。